

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Changes in Korean Ancestor Rites : A Social Survey of the Middle Class in City Apartments

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004310

韓国祖先祭祀の変化

——都市アパート団地居住者を中心に——

朝 倉 敏 夫*

Changes in Korean Ancestor Rites
—A Social Survey of the Middle Class in City Apartments—

Toshio ASAKURA

Korean culture is deeply based on Confucianism. This influence is seen not only in ancestor worship, but also in the sphere of daily life, such as in human relations, and especially in relationships among the family and in kinship.

Yet in recent years, with the progress of modernization and industrialization, Korean society is experiencing a sudden change. A parallel, major change in people's values can be observed.

At present, traditional culture based on Confucianism and modern culture are in competition, yet both can coexist, as demonstrated by the heightened interest in maintaining Confucianistic ancestor rites.

In this paper I present an example of the changes in Korean ancestor rites, and, by a statistical survey, demonstrate changes in Korean society.

First, ideas on seasonal rituals (*sije*), holiday rites (*ch'arye*) and death day rites (*kije*) in the traditional culture are presented. An example of changes in each rite is then examined. Changes can be observed in the weakening of the function of patrilineal lineage (*munjung*) influence in the seasonal rituals, the changes in holiday rites from third cousin agnates (*tangnae*) to the limited intimacy of siblings, and changes in the death day rites, including the object of worship, the person who is responsible, and the participants.

The background of these changes in Korean society is then examined.

* 国立民族学博物館第4研究部

1. Lifestyle has been modernized by urbanization and industrialization, and, as a result, traditional rites do not suit the modern lifestyle. There is a tendency to simplify the rituals. At the same time, the phenomenon of the traditional rites as adopted by the modern family can be examined;
2. Due to the spread of Christianity, there has been either an avoidance or a modification of rites. In particular there a large number of Christian females, and the role of these women must be considered as they must handle the troublesome preparations for traditional rites;
3. In contrast to these modern movements is the movement for preservation of tradition or reconfirmation of tradition;

To both exemplify and assess the degree of such change, I surveyed the conditions and attitudes of the Korean middle class in city apartments and group housing. The group has absorbed the burden of modernization. The results show the current conditions and attitudes which led to the simplification of ancestor ties in the rites. There is also a conservative desire to preserve tradition, but, at the same time, there is a diversification of values. This phenomenon reflects the diversification and confusion of values in modern Korean society.

はじめに

I. 伝統的祖先祭祀とその変化

1. 伝統的な祖先祭祀
2. 事例から見た祖先祭祀の変化

II. 現代社会と祖先祭祀

1. 都市化・産業化
 - (1) 祖先祭祀の簡素化
 - (2) 祖先祭祀と家族・親族
2. キリスト教の普及

3. 伝統の固守

III. 都市アパート団地居住者の祖先祭祀

1. 問題の所在
2. 調査の概要
 - (1) 調査方法
 - (2) 調査対象
3. 調査結果

おわりに

はじめに

韓国社会の伝統文化は儒教を基盤にしているといえよう。それは、日常の生活にかかわる規範にも、人の一生を通した儀礼にも、家族や親族をはじめとする人間関係においても深く根をおろしている。

一方、近年の韓国社会は、近代化・産業化が進展するなかで急激な社会変化を経験しており、人々の価値観においても大きな変化がみえている。

こうした状況の中で、儒教倫理に根ざす伝統文化と近代化との相克によって様々な問題が生じている。そして、これらの問題を解決するために多くが論じられ、また両者を両立させていくための方策が模索されている。1986年9月に韓国国際文化協会主催で『儒教家族の精神文化のダイナミクスー過去と現在一』と題して開かれた国際セミナーにおいて、「歴史と文化」「地位、性役割、自己実現」「精神力学」の3セッションで活発な討論がなされたのも、その一つの表われである。この儒教と近代化の相克と両立については、韓国社会の問題に留まらず、NIEs 諸国の経済発展とも関連し、広く関心が高まってきている。

これと並行して、儒教倫理を最も具現化したと考えられる「祖先祭祀」にも関心が高まっている。1986年度韓国文化人類学会全国大会では「韓国祖上崇拜の総合的考察」を主題として様々な角度から祖先祭祀が論じられ¹⁾、また同年に崔吉城の『韓国の祖上崇拜』が刊行されたのも、こうした動きの中にとらえることができよう。

本稿は、韓国祖先祭祀のあり方の変化を、事例の提示と数量的調査によって、韓国社会の変化を背景に映しだそうとするものである。そして、先祖を祀る祭りの変化を通して、現代韓国の社会・文化の根を探り、今後の韓国社会の歩む道を考察しようとするものである。

I. 伝統的祖先祭祀とその変化

1. 伝統的な祖先祭祀

祖先祭祀の「変化」について言及するには、それが変化する前の姿である「伝統的」²⁾社会においてどうであったかを明らかにしておかなければならない。韓国社会において、いわゆる「伝統的」な祖先祭祀のあり方はどこに求められるであろうか。ここでは、李氏朝鮮時代の朱子家礼に則った『四礼便覧』など「礼書」に基づいて行なわれ

1) その内容については、[韓国文化人類学会 1986]に報告されている。

2) 「伝統的」という概念について蒲生は、日本では「かりに第二次大戦後の現在を『現代』と規定するなら、この『現代』以前から引き継がれたすべてのものは、その成立年代に拘わらず『伝統的』である。しかしここでは『現代』に直接先行した時代一およそ明治20年代から第二次大戦終了時までをとりあえず一括して考えている一に存在し『現代』に引き継がれてきたものは、差し当たって限定して『伝統的』と呼んでおく」と規定している[蒲生 1974: 190-191]。筆者もこの概念に同意するが、韓国ではこの時代は日本の植民地時代にあたり、時代的には李氏朝鮮時代にさかのぼらなければならない。

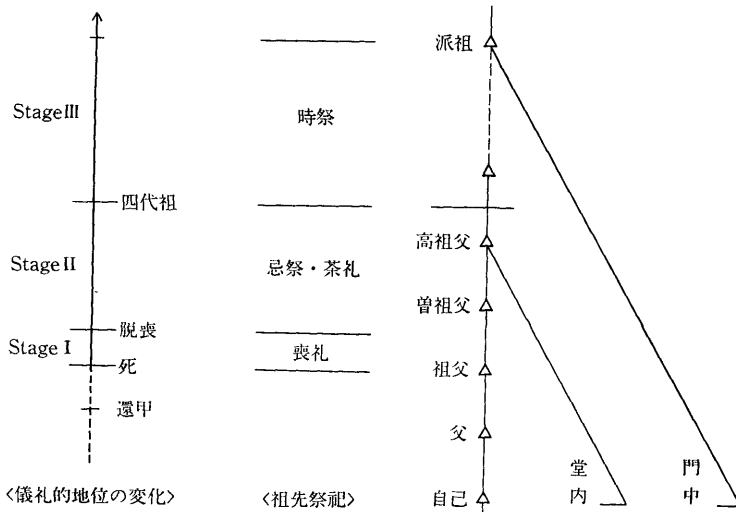


図1 伝統的祖先祭祀

る祭祀のあり方をモデルとして設定しておくことにする³⁾。

この儒式の祖先祭祀においては、人が死に、祖先として祀られる過程には、その儀礼的地位の変化がみられる(図1)。まず人が死に際して複雑な「喪礼(葬礼)」が執り行なわれ<stage I>、喪を脱してから「祭祀」に転化していく。この段階から、各家において祭主から数えて四代祖までの祖先に対して、いわば故人の忌日(命日)にそれぞれの「忌祭」があげられ、また名節には「茶礼」といい、各家で「忌祭」に祀られるべきすべての祖先が祀られる<stage II>。そして、五代祖からは次の段階に移り、「時祭」といい、ふつう年に一度日を定めて墓において祭祀をあげる⁴⁾<stage III> [JANELLI & JANELLI 1982: 84]。

これらの「忌祭」「茶礼」「時祭」について、その伝統的あり方の概要を簡単に示しておこう⁵⁾(図1)。

(A) 忌祭: 各祖先の命日の前夜半過ぎから夜明までの間に、家内の大庁に位牌をそなえ、祭物をそなえて行なう。忌祭を行なう主たる義務と権利は父から長男に継承されるが、その他の子孫や近親者も参加するから、これに集まる人々は高祖父(四代前

3) 張哲秀は、1900年に刊行された『増補四礼便覧』と1974年から韓国の各道別に調査報告した『韓国民俗総合調査報告書』の資料をもとにして、慣行としての冠婚葬祭が礼書のそれとどのように異なっているかを明らかにしている[張哲秀 1984]。実際の慣行もまた、地方、家門によってその詳細は異なっている。

4) ただし「不遷位」といい王が未来永劫祠堂に祀ることを許した神位は5代祖以上になっても、その忌日に祀られる。

5) 伝統的祖先祭祀については、社会組織との関連では拙稿[朝倉 1989a]、位牌祭祀のあり方は拙稿[朝倉 1989b]をあわせて参照されたい。

の父系祖父)の子孫たちであり、この範囲はチバン〔堂内親〕と呼ばれる父系近親者たちの範囲といちおう対応する。長男の系統で四世代を過ぎていても、次男以下の系統で四世代以内の子孫のある場合には、厳格に行なう場合には祭祀をそれらの子孫の家に移して行なう(祭遷)。

(B) 茶礼(名節祭祀):年に3~5回、元旦や秋夕(陰暦8月15日)などの名節の朝、忌祭のささげられるすべての祖先に対して行なわれる。普通はチバンの本家(クンチプ)に全員が集合して祭祀を行ない、ついでチバン内の各家をまわってそれぞれの家の祖先を祀る。

(C) 時祭(墓祭):五世代以上前の祖先たちに対して、毎年一定の日(陰暦10月または3月)に墓地で行なわれる。この祭祀は各個の家を離れて、当該祖先たちの子孫全員の責任において、普通は門中(父系血縁による親族集団)の行事として行なわれる。この時には始祖から順に一つ一つの墓をまわって祭祀をする[嶋 1986: 256-257]。

2. 事例から見た祖先祭祀の変化

これらの祭祀も現代生活の中で、これまでのあり方とは違った様相をみせている。任敦姫は、それぞれの祭祀の社会的側面に注目して、事例をあげつつ、祖先祭祀がどのような変貌をみせているかを指摘し、今後の姿を予測している[任敦姫 1985, 1986a, 1986b]。この指摘をふまえて、筆者の事例などを加えながら、その変化の局面を時祭から順にみていくことにしよう。

(C) 時祭——門中の威勢のための儀礼——:

時祭は、そのムラに最初に入ってきた入郷祖をはじめいわゆる派祖につながる門中の子孫によって祀られ、その目的は近隣に住むある地域住民に対して自分たちの門中の威勢を誇るためにある。しかし近年、農村から都市への人口移動にともない、門中がムラを維持することが難しくなり、門中成員であることが特に生活の助けにもなくなってきた。また、時祭の経済的負担もかなりのものである。それで門中の結束を基盤とした時祭は、だんだん弱体化・簡素化されているという[任敦姫 1985: 53]。

ことに若年層では時祭という言葉さえ知らず、大学生200余名中わずか10余名しか時祭が何かを知らず、その学生も時祭に直接参与した経験はほとんどないという結果であった[任敦姫 1986b: 161]。

時祭が行なわれている場合でも、祭日を一定の日とせず日曜日など都合のよい日に変更したり、祭需(供え物)や儀礼節次を簡素化したり、祭官が必ずしも宗孫に限られなくなっている[崔在錫 1987: 261-263]。また、これまで祖先祭祀のために使わ

れてきた門中財産も、奨学金など子孫の福祉のために使う方向に変わってきているという [任敦姫 1986a]。

このように時祭はその概念が弱化しているが、一部において、他者に自慢できる代表的な先祖の祭祀を盛大に行ない自門中の象徴としたり威信を誇ったり、急に金持ちになった人のあいだなどでは祖先の墓碑を新たに建立するといった逆の現象もみられる。

(B) 茶礼——堂内結束のための儀礼——：

茶礼は、チバン〔堂内親〕と呼ばれる近親たちが高祖父（四代祖）の子孫ということとを強調する儀礼といえる。このチバンは八寸（ふたいとこ）までの関係で、ムラ社会では農事や吉凶時など何かにつけて互いに助け合う関係にあった。しかし近年、農事は機械化され、また八寸までの近親が隣り合って住む環境になくなってきた。このため日常生活での相互協力の必要性が減少するにしたがって、近親間の相互的経済的協力と結束を確かめてきた茶礼はしだいに消えていくことになる。しかし、父母子女間の感情的紐帯、および兄弟姉妹間の相互的結束感に基づく茶礼は今後も維持されるであろう。茶礼はその目的をチバンの結束から兄弟姉妹の親睦に転化しているといえよう [任敦姫 1985: 53, 1986b: 172]。

(A) 忌祭——家族間の儀礼——：

忌祭の対象となる祖先は、宗家では四代祖までであるが、一般には子孫が記憶し、そして愛する祖先といえる。参加者は直系子孫のみならず傍系子孫までも含む近い家族のような親戚間といえる [任敦姫 1985: 48]。したがって、宗教的理由によって忌祭を行わないことはあっても、一般的に忌祭そのものを行わないということはまれである。ただ、そのあり方はいくつかの変化の局面がみられている。

a. 忌祭回数の縮小

父の祭祀に母の祭祀を合わせて行なうという事例がある。もともと父の祭祀にその位牌とともに母の位牌を「合設」という慣行もあるが、それとは異なり母の祭祀を父のそれと「合祀」し、母の忌日には祭祀を行わないことになる。

また高祖父母や曾祖父母の祭祀を父の祭祀と合祀するという事例もある。父が死んだ後ソウルに住む長男が曾祖父母までの祭祀を行なうことになり、地方に住む母がその度ごとにソウルに行かねばならず大変なので合祀したという。いわば父の祭祀に名節に行なうように祀られるべき祖先のすべてを一度に祀ることになる。

この他、忌祭は父母あるいは祖父母までしか行なわず、高祖・曾祖の祭祀を時祭にまわす傾向になるという指摘がある [任敦姫 1985: 53]。実際、1983年から忌祭は祖

父母のみとし、曾祖父母と高祖父母は祖父の墓の近くに碑を建て、門中の派の人がすべて集まる時祭とは別の秋の都合のよい日に堂内の人が祀ることにしたという事例もある。父が死亡した後に資金ができれば祖父母の碑も建てるという。これは単に回数を減らすということだけではなく、忌祭として祀る対象祖先を減らすことを意味する。

b. 儀礼責任者の変化

祖父の祭祀を、長男が死亡した場合、孫ではなく次男以下の子息に任せる傾向にあるという指摘がある [任敦姬 1985: 53]。

これは一つには、孫が祖父母を祀るよりも子供が親を祀るという、より身近な人が祭祀をしようという意味をもつ。高祖父・曾祖父の代を合祀したり、父や祖父の代までしか祭祀しなくなるのも、みたこともない祖先に対してはそれほど愛着がわかないという理由があろう。

もう一つには、次男以下の祭祀責任という問題がある⁶⁾。

今日、長男が都市あるいは海外にまで出て行くという場合が多くなってきた。したがって、必ずしも長男が家に残って祭祀をすることがなくなってきたため、場合によっては次男以下も責任を負わねばならなくなってきた。さらに、従来農村では祖先祭祀を行なうための位土(祭田)が長男に相続されたが、長男が都市に出てしまった場合をはじめ、財産の分与についても変化がみられるようになってきた⁷⁾。

この他に、娘しかいない場合の祭祀責任者の問題がある。この場合、従来はふつう父系親族からしかるべき男子を養子に迎えた。時として婿養子・入夫婚もみられたが、その場合の男子は依然として生れたままの「姓」を名乗るため、祖先祭祀の原則である「異姓不祀」に違反することになり、これらの慣行はひどく嫌われた。しかし、各家において子女の数が減り、娘しかいない家の数が増加してきた。そうした中で、あくまでも男児の出生を願うか、養子を迎えるか、それが不可能なら祭祀の継承を断念するか、あるいは儒式祖先祭祀の原則にもとることがわかってでも婿に祭祀を任せるか否か、選択をせまられる状況になってきた⁸⁾。

6) 次男以下の祭祀については、「祭遷」といい、嫡系の宗家ではすでに五代以上を数えても傍系(次男以下の支系)の分家では四代以内に含まれるという場合、四代奉祀を忠実に実行するため祭場・祭主などを分家に移して忌祭を続けることもある。また、済州島をはじめ周辺地域に「分割祭祀」がみられるが、ここではそうした場合は除く。

7) 慶尚南道安東郡陶山面土溪洞H部落とK部落を1973年に調査した佐藤によれば、「長男は父母と同居するのが原則であるが、両部落において長男の他出が多いのは現在の農村家族の変化を示すものとして重要である。韓国では長男の社会的優位性は就学においても次・三男に卓越していた。(中略)現実の父祖の家が廢屋と化しても、祭祀は長男によって継承されていくのである」と、父母と別居しても長男の祭祀継承を順守しているという報告がある [佐藤 1975: 80-83]。

8) 養子は、子息のいない場合に、ことに宗家では必ずといってよいほど迎えられた。崔在錫は、

c. 儀礼参加者の変化

かつては嫁に出た娘たちが祭祀に来ることはなかったが、今は娘が婿とともに父母の祭祀に参加し、扶助もしている事例が増えているという【任敦姬 1985: 53】。

確かに娘たちの祭祀への参加は、他の報告にもみられている。ただ、参加の仕方については、祭祀に直接加わって礼拝を行なう者、祭祀の準備を手伝う女性たち、忌祭の家を訪れるが儀礼には直接加わらず隣室で見守っている者に分けられ、何をもって祭祀への参与とするかは留意しなければならない【末成 1985: 18】。

娘の参加とも関連して、その夫までが妻家の祭祀へ参加するという例も増えてきている。ことに妻の両親の祭祀には、単なる参加だけではなく、祭祀の負担を分担するという事例が多くみられている。

これらの事例を整理してみると、次のような変化の流れが予測されよう。

1. 祭祀の対象が、より近い人、記憶のある人へと変化している。高祖父母・曾祖父母といった会ったこともない祖先よりも、祖父母、ことに父母の祭祀、あるいは妻の父母という身近な人の死への追慕の気持ちが素直に表出される傾向にある。もちろん祖父・曾祖父・高祖父、そして派祖へと遡る父系系譜への帰属感は維持されているが、祭祀という行動においては近くににいるという現実的条件がより強く働く状況になってきているといえよう⁹⁾。
2. 祭祀に関するつきあい関係においても、縦の関係から横の関係へという変化がみられる。すなわち、親族よりも家族、ことに兄弟姉妹間のつきあいが強調されてくる。なかでも、これまでは「出嫁外人」として建前としてはつきあいがみられなかった姉妹とのつきあいが顕在化してこよう¹⁰⁾。
3. 一方、祭祀を行なう人は、人口問題によって各家が息子・娘の区別なく二人子女

ㄨ 養子制度とそれに関連する祭祀相続の実態について全羅北道の一部落を調査し、「入養については1940～50年代までは事例があるが、60年代からはほとんど養子の事例を探せなかった」と報告し、祭祀相続については「離村の一般化により祭祀の直系主義は弱化し、奉祀権が次男に移っていったり、父が生存していても子に引き渡すこともある」と指摘している【崔在錫 1986: 215】。

9) 未婚のまま死亡した子女や異常死した人の霊は、儒式祭祀ではなく巫祭として慰霊すべきとされているが、その親が忌日や名節にインフォーマルには儒式で祭祀する例がある。身近な人の祭祀をするという意味では、こうした人々の霊の祭祀も一般化されていくことも考えられる。

10) 姉妹とのつきあいの他に、女性を介在して姻戚関係とのつきあいも考えられる。韓国の姻戚関係については、済州島の事例【佐藤 1976】を除いてはこれまであまり報告がなく、伝統的社会におけるつきあい関係はよく分らないが、ことにかつての両班社会では祖先祭祀をめぐるつきあいはなかったものとする。しかし、夫妻の親同士のサドン関係や母方の実家(外家)や妻方の実家(妻家)とのつきあいはその重要性を増しており、今後の研究課題の一つとしたい。

運動が推進され小規模家族になっていく中では¹¹⁾、長男からそれ以外の兄弟あるいは姉妹へと、誰でもが祖先を祭祀する権利と義務をもつ方向へと変化していくことも予測されよう。

4. これはまた、財産相続のあり方とも関係してくる。そして、それは歴史の変移のなかに捉えることもできよう。

もともと高麗時代末から李朝時代の初めにかけては子女均分の財産相続が一般的であり、15世紀末に完成された『経国大典』においても、祭祀継承者に対してのみ五分の一の加算が認められてはいたものの、男女および出生順位に関係なく均分の原則が規定されていた。それがしだいに父系血縁が重視され、祖先祭祀の継承による系譜の継嗣が強調され、嫡長子に奉祀が集中するようになり、嫡長子に対する祭祀のための財産相続が大幅に加算されるようになった。そして李朝末期には男子のうちでもとくに長男を優待した相続慣行が一般化していった [伊藤 1986: 250]。したがって、今後韓国の相続法、すなわち息子・娘の区別なく均等相続が、法的次元のみならず慣習にまで行なわれると韓国の祖先崇拝は朝鮮前期のように娘によっても行なわれるという指摘もでてくる [任敦姫 1985: 53]。

Ⅱ. 現代社会と祖先祭祀

韓国社会は今世紀に入ってから、日本の植民地時代、それからの解放、朝鮮戦争と南北分断、その後の「漢江の奇跡」と呼ばれる高度成長といった激動期を経てきた。ことにここ二十数年間における経済成長率は世界でも比類のないものであり、さらに今日民主化に向けての歩みを始めている。そうした急変する社会の中で、韓国の伝統文化も様々な分野で変化している¹²⁾。

ここでは、現代韓国社会において伝統的祖先祭祀の変化の条件となる社会変化について概括的に捉えておこう。

1. 都市化・産業化

韓国社会の近年の急激な変容は、都市化と産業化という言葉によって簡潔に表現で

11) 中央日報「86年度のわが国社会指標」[1987. 1. 23]によれば85年の調査結果「理想的な子女数」は2名であるが、実際に産むのを願う「期待子女数」は2.48名である。なお「期待子女数」も76年が3.35名、82年が2.82名であり、かなりの減少傾向にある。

12) 1970年代半ばまでの急激な社会変化による伝統文化の変化については、[韓国文化人類学会 1975]を参照されたい。

きよう¹³⁾。産業化が本格化するの、1960年代後半に軌道に乗った経済発展5カ年計画以降であるが、都市への人口集中による都市の膨張は、解放後まもなくすでに始まっていた。しかし、離農向都型の本格的な都市移住は、明らかに産業化にともなうもので、若い世代を中心にした新しい住民層を都市にもたらした。70年代の中ごろに急速に都市の産業社会に吸収されたのは、主に常民出身層であり、もともと儒教的な生活慣習に対して関心が薄いという社会的背景もあった [伊藤 1985b: 261-263]。

(1) 祖先祭祀の簡素化

祖先祭祀は日本の統治時代においてある程度簡素化したともいわれるが、「孝」の観念と直結しており韓国では非常に重要視されてきた。1973年には冠婚葬祭を簡素化するため政府が「家庭儀礼準則」を制定したが、葬祭に関しては思うような成果はあげられなかった。しかし、時代の推移にともない現代生活は時間的忙しさを増し、労力や経済的にも負担のかかる伝統的祖先祭祀を合理化しようとする動きが次のような局面においてみられてきた。

a. 合祀：

高祖・曾祖を父の祭祀時に合わせて祀ったり、母の祭祀を父のそれと一緒に夫婦合祀する事例がみられる。例えば高祖父の代まで祀る家では、父、祖父、曾祖父、高祖父とそれぞれその配偶者たちの忌祭を少なくとも年8回行なわなければならない。親族が近隣にいれば大きな問題ではないが、都市で分散して居住する場合そのたびごとに集まるのはかなりの負担になってくる。また年に1～2度であれば、親族全員が集まろうという気にもなるという。

b. 祭祀時間：

本来は夜中の12時を期して行なわれるが、その時間になっては翌日の会社や工場の勤務に支障を来すこともありうる。ソウル市に居住する中学生の学父母355名を対象とした Seo の調査によれば、夜11時以後に行なうという人が全体の52%を占め、未だ祖先の霊が夜に現れると考える傾向が支配的なようであるが、しだいにより生活に便利な時間に祭祀を行なうものと予想される [Seo 1987: 148]。

c. 祭需・費用：

祭需（供え物）として陳設されるものは各家ごとによって多少異なるが、礼書にしたがえば肉・魚・野菜・果物などかなりの品数と量が用意されなければならない。これらをすべて準備し調理するのは大変であり、簡単にしたいという主婦の思いがある。

13) 韓国社会の都市化と産業化については、[伊藤 1985a] に簡潔に説明されている。

また、こうしたものより、むしろ故人が好んだものを供えたほうがよいという考えもある。したがって、その経費も徐々に減少する傾向にある。

d. 位牌・紙榜：

前述した Seo の調査によれば、紙榜（紙に書いた位牌）を必ず使用する人が全体の 75% である [Seo 1987: 148]。しかし、筆者の調査地である農村においても紙榜とともに写真を飾る事例がみられ、故人を偲ぶうえにも写真に代置されていくことも考えられる。

以上、総じていえば儒式の祖先祭祀も簡素化の方向へと進んでいるといえよう。こうした動きに合わせて、祖先祭祀を仏教式にすることによって簡素化を計るという事例もみられる¹⁴⁾。

(2) 祖先祭祀と家族・親族

都市化・産業化という社会変化は、必然的に家族形態や家族生活のあり方にも変化をもたらした。李萬甲は、第二次大戦後から 1970 年にかけての社会的変化と、それにとまなう結婚と家庭生活における変化について言及している。そこでは核家族の増加と平均世帯人員の減少が推測され、女性・子供の地位の向上と妻の実家との関係の緊密化などが指摘されている [李萬甲 1971: 87-90]。それからさらに 20 年近くが経過し、近代化に即応した家族の様態の変化が進んでいる。

こうした家族の変化が祖先祭祀に影響を及ぼしている。

まず、子女の数が減ることによって、誰が祖先を祀るのかという祭主（祭祀責任者）の問題が生じてきた。従来、祖先を祀るのは長男に定められていた。そのため男児の出生が強く望まれ、やむをえず娘しかない場合にはふつう婿をとらず父系親族から養子が迎えられた。しかし、人口問題による家族計画や教育費の負担などから子女の数が減少し、それによって娘しかない家族の数が増え、また養子を迎えるにも困難が生じてきた。こうした状況の中で、祭祀を誰にまかせるかという選択をせまられるようになってきた。

次に、女性の地位の向上および妻の実家との関係の緊密化も、祖先祭祀のあり方に影響を与えている。娘が実家の祖先祭祀へ参加したり、それにその夫がついていくの

14) 父の死後四十九日に寺に行き、三周忌にあたる「大祥」まで済ませてしまう祭儀に参加したが、はじめ本堂正面の仏像に向かって巫俗との習合を思わせるにぎやかな読経があり、次に本堂右横に安置した紙榜に対して僧が祭官の役をし、儒式と相似した手順の祭儀が行なわれた。このほか葬儀においては、葬儀社にすべてを任せたり、最近では「葬礼式場」の必要性が問われる [東亜日報 1987.8.4] など、業者にたよる傾向が強まっており、祭儀においても次第にこうした動きがでてくることも予想される。

も、その表われであろう。

また、韓国の家族法は、男系血統を中心とした祭祀本位の儒教的家族制度の原理が生きてはいるものの、1977年には相続において女性の地位を向上させる法の改正がなされている[山田・他 1986: 112-115]。こうした相続に関する法律の改正も、それが従来祭祀と不可分の関係にあった祖先祭祀に大きな変化をもたらす要因となつてこよう。

これら近代化による祖先祭祀の変化とともに、むしろ伝統的規範である祖先祭祀を反映した家族・親族の新しい現象の局面もみられる。

その一つは、都市に流入した若年層と農村に残された老人が祖先祭祀によって結びつけられているという点である。すなわち都市にでた子女はそこで夫婦家族を形成するが、ことに長男は祖先祭祀のたびに故郷の父母の家に戻る。こうした場合世帯としては別にしている、「家」としてはその継承と繁栄が願われていることになる。こうした形を李光奎は「修正された直系家族 (stem family in a modified form)」と呼んでいる[LEE 1986]。

もう一つは、故郷における門中にかわる都市における「宗親会・花樹会」の形成である。これは、同じ門中の成員が都市において共同の事業や情報交換のための連絡事務所を設け、定期的に親睦を兼ねた集会を開くというものである。ここでは族譜の編纂、祖先の墓碑・祭閣の建立、奨学基金の運営などが行なわれる。門中が故郷において祖先祭祀を主たる目的としているのに対して、宗親会・花樹会は都市において親族の保護と福祉を目的とするという違いはあるが、その成員の連帯と財産の維持という原理は同じである。

2. キリスト教の普及

現代韓国社会にあって、その驚異的な経済成長率の伸びとともに、キリスト教の教勢拡張は目をみはるものがある。韓国のキリスト教については、天主教(カトリック)と改新教(プロテスタント)があり、ことに改新教ははなはだしい諸派分立の歴史をたどってきており、すべての教団にわたって体系的に論ずることは難しい¹⁵⁾。ここで

15) 韓国のキリスト教について、参考のためにごく簡単にその概要を記しておく。

キリスト教の普及と広範な社会活動は目を見張るものがある。1960年以後の増加は急激で、1980年には全人口の約25%に達している。都市部の人口が1980年には総人口の過半数を占め、しかも信者が農村部に少ないことを考慮すれば、都市におけるキリスト教信者の占める割合は半数近くになると考えられる。新旧別にみると新教が圧倒的多数を占めており、これはさらに多くの宗派に分れている[伊藤 1985b: 276]。

この韓国での教会成長の促進要因について、坂元一光は先行研究を整理して次の3つをあげ

は、キリスト教の普及が伝統的な儒式の祖先祭祀とどのような関係をもつのかについてだけ言及しておこう。

まず、この関係について、崔吉城はその歴史的推移を次のように説明している。

キリスト教の受容は、はじめカトリックが伝えられたが、儒教によって形式化された祖先祭祀と衝突した。その大きな事件が辛亥教難（1791年）である。カトリックが天主教という一つの学問として研究された時はそれほど問題ではなかったが、それが宗教として信仰され伝道活動をするようになると、古い習慣を破り、新しい生活様式を作り出す必要があった。そのときに、祖先崇拜（祭祀）と真正面から対立したのである。一方、改新教（プロテスタント）の伝来は、辛亥教難以来、開化期の西洋文明の流れにしたがって殉教や衝突なしに入って現在に至ったものである。改新教の宣教方針には儒教祭祀は親孝行の追慕行事としてみる消極的な態度があるにもかかわらず、つねに衝突する潜在性がある。しかし共存しながらキリスト教はさらに拡大されていくだろう [崔吉城 1985: 154-156]。

そして現在は、一般的に天主教では伝統的祖先祭祀に対し比較的寛容な態度であり、改新教ではそれを偶像崇拜として否定する傾向にあるといわれている。しかし、坂元一光は「追悼式という死者の記念日の設定は、儒礼による祖先祭祀との正面からの衝突を緩和していると考えられるのである。しかもこの追悼式はまた、社会変化の中でおざなりになりがちな儒式祭祀を、新しい別の形式によって維持しているとも考えられる」と述べ、改新教を含むキリスト教が伝統的宗教生活に適合していると指摘している [坂元 1984: 84]。

では、実際にキリスト教徒は儒式の祖先祭祀をどの程度行なっているであろうか。朴順川がソウル市内の主婦 360 名を対象として調査した「都市主婦たちの家庭生活観と祭祀儀礼」によれば、伝統式に祭祀を行なうのは全体の 70.8% であるが、仏教徒は 94.5% が伝統式で行なうのに対してキリスト教徒は 46.7% である [東亜日報 1987. 9. 22]。確かに数字のうえでは他宗教の信者に比べてキリスト教徒は伝統式に祖先祭祀を行なう人は少ない。しかし、それでも半数近くは伝統式で行なっている。

カトリック信者のある主婦は「義理の父母の祭祀には紙榜は書かないが飲食は原則のままに準備する。祭祀のたびに教理と伝統儀礼の間で葛藤をもつ」と述べている。

くている。1. 民族間、国家間の葛藤状況におけるアイデンティティと統合のシンボルとして成長してきた、2. キリスト教を現代韓国の大衆層の生活に意味付けを付与する象徴的体系として捉える、3. 伝統的シャマニズムとの関連でその成長を捉える [坂元 1984: 82]。

そして、柳東植は「現在、韓国人と韓国形成に積極的な活動をしている宗教はキリスト教である。（中略）今日、韓国人の心性を語るとき、特にその形成過程面から見ると、キリスト教を一個の重要な宗教的要因として数えなければならないだろう」と韓国宗教におけるキリスト教の位置を捉えている [柳東植 1975: 184-185]。

また、改新教信者のある主婦は「名節と忌日には簡単な飲食のみ準備し、家族と近い親戚で追悼礼拝を行なっている」という。しかし、一方では「祖先崇拝は決して偶像崇拝ではなく、十戒命にも『父母に侍り仕えよ』とある。祭祀は祖先に対する崇慕と感謝を象徴する一つの儀礼で、宗教とは別個の問題である」という意見もある。こうした立場からは、「キリスト教だからという理由は、煩わしさから祭祀を行なわないことの口実である」という批判もある〔東亜日報 1987. 9. 22〕。

これまでキリスト教の教義と儒式祖先祭祀との関係については様々に論議されてきたが¹⁶⁾、その答えは実際の社会において様々に解釈されているようである。とはいえ、キリスト教が伝統的祭祀を全く肯定しているとはいえず、その普及によって伝統式祖先祭祀は簡素化・修正の方向に進んでいくことは確かであろう。それとともに、儒式の祭祀にあって実際にその準備をするのは主婦であり、ことに長男の嫁である主婦のノイローゼの要因に祖先祭祀の義務と負担があることが指摘されており〔RHI 1986〕、またキリスト教の信者に女性が多いことを考え合わせると、キリスト教が祖先祭祀に影響を及ぼすとすれば、教義以前に儒式の祭祀における女性の役割という現実的条件も考えられなければなるまい。

3. 伝統の固守

近代化が進む一方で、民族の伝統文化を再認識・再評価しようという動きがある¹⁷⁾。こうした動きは、研究と教育（民俗学の普及）、保存と啓蒙の事業（文化公報部による文化財政策・博物館・公演など）、実践活動（仮面劇サークル・農楽）、生活への応用という形をとって展開しており、とくに1970年代後半以降は定着した観がある。その一方で、セマウル運動以来、実生活では農村においても民俗文化の衰退が急速に進んでいる。しかし、それと同時に都市部では新しい社会状況のもとで国民統合の社会的媒体ないし象徴として重要性を帯びており〔伊藤 1985b: 275-276〕、新しい形での伝統文化の再認識がなされている。

また都市住民の中には、上昇主義と教育水準の向上に根ざして高い社会的・経済的地位を達成していこうとする、いわゆる「両班化」現象 (Yangbanization) が起きている〔LEE 1986〕。

こうした人々を狙って『韓国人の家訓』や『名家の内訓』といった本が出版され¹⁸⁾、

16) キリスト教の教義における儒式祖先祭祀の位置付けに関する論議については〔崔吉城 1986: 224-234; 柳東植 1986: 85-93〕などを参照されたい。

17) 民俗文化の再認識・再評価の動きについては、拙稿〔朝倉 1987〕を参照されたい。

18) 農村から都市に若い時に出てきた人同士が家庭をもった場合をはじめ都市生活者の間で、冠／

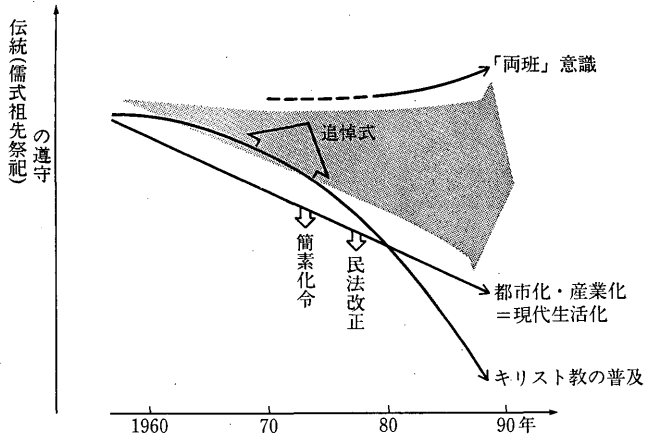


図2 全体的図式(仮設)

伝統的冠婚葬祭の再認識という動きも進んでいる。そして、その裏側には時代を通して伝統的生活規範である儒教の礼節を守り続けてきた「両班」の存在があり、彼らは現在までそうしてきたように未来にわたっても儒式祖先祭祀を固持していくのである¹⁹⁾。

最後に、1960年代以降、伝統的祖先祭祀が社会変化を背景としてどのように展開してきたかについて仮設として全体的図式を示しておく(図2)。

以前にどのくらい祖先祭祀が行なわれていたかを知る資料がある。これは、1971年にソウル市の主婦350名を対象とした調査で、「祭祀を行なう」が74.3%、「行なわない」が25.7%となっている[Moony 1974: 82]²⁰⁾。これに対して、1987年に同じくソウル市の主婦360名を対象とした調査によれば、「名節に伝統式祭祀を行なう」が70.8%、「キリスト教式追悼式を行なう」が20.6%、「全く行なわない」が7.5%である[東亜日報 1987. 9. 22]。この数字からだけみれば、ソウル市においても祖先祭祀を行なっているかどうかについてはここ数十年の間あまり変化していない。

しかし、都市化・産業化という流れの中で、現代生活に適応すべく、また簡素化令

1) 婚葬祭のやり方についてなど分からなくなっており、依りどころとなる規範が求められている。これに答えて、家訓は家庭教育の根本として韓国伝来の家訓の紹介[孫仁銖・李元浩 1984]、あるいは両班家系の宗婦による内訓の口述[朴弼述 1985]といった家庭生活図書が続々と刊行されている。

19) 制度・身分としての両班は消滅してから久しい。しかし両班がもともと法的な規定を欠いた存在であったため、李朝時代から続く両班への上昇志向はいまだに根強く、しかもむしろ拡大する傾向にある[吉田 1986: 420]。

20) 数字は、LEE Hyo-jac 1971 *Urban Kinship Relations in Korea* Korean Research Center Table 6-1 pp. 160 から引用したものである。

(1973年家庭儀礼準則)や民法改正(1977年)によっても、祖先祭祀はやはり合理化される方向に向かっている。さらにキリスト教徒の増加により、キリスト教式の祭祀への修正あるいは伝統的な祭祀を行なわないという方向への動きが加速されている。したがって時間的推移のなかでみると祖先祭祀は全体としては伝統的あり方が厳密に行なわれないという下方向に収束しているといえよう。そしてまた、これを現時点においてみると、簡素化あるいはキリスト教式へという下方向へのベクトルとともに、伝統的なあり方をさらに順守しようとする上方向へのベクトルもあり、価値観の多様化を反映して祭祀のあり方の偏差の幅は拡散しているともいえよう²¹⁾。

Ⅲ. 都市アパート団地居住者の祖先祭祀

1. 問題の所在

これまでみてきたように、韓国社会では伝統的な規範が急速な社会変化によって揺り動かされており、祖先祭祀においてもいくつかの事例から様々な変化の局面が指摘されている。しかし、事例の提示のみでは、そうした変化の局面がどの程度進展しているのか、そうした事例が社会一般の傾向といえるのか、あるいは今後の変化の方向を示しているかについては必ずしも知ることはできない。そこで、これらの問題に接近し、仮設として提示した全体的図式を検証するうえでも、今日韓国社会にあって増加しつつある都市に居住する中産層を対象として、祖先祭祀の実態とそれに対する態度について、アンケート調査により数量的に把握してみることにした²²⁾。

中産層を対象としたのは、一つには韓国社会でも中流意識・所得水準などいくつかの統計から中産層が国民全体の60%を越えてきたといわれており、二つには経済成長にともなって成立した中産層は、同時にその経済発展の主たる担い手でもあり、政治の民主化をはじめ韓国社会が近代化する中でこれから進む道についての意志決定の役割を果たしていくと考えられたからである²³⁾。

21) 価値観の多様化は、現在韓国社会で進められている「民主化」とも結び付くと考える。と同時に国民の統合をめざす新しい価値観の定立が求められている。

22) 今回は数量的な把握を目的としたが、今後はこれに加えて都市アパートにおいて祭祀がどのように行なわれているか参与観察がなされなければならない。例えば、アパートにおける祭祀空間、祭祀の儀礼など具体的な事例の分析により何が変わり何が変わらないのかを明らかにし、韓国人の祖先観にも接近していかなければならない。また儒教による「孝」を具現化した祖先祭祀は、生者への「孝」である老人扶養とも関連して考えられる。これらについては今後の課題したい。

23) 毎日新聞のインタビューに答えて、韓完相(ソウル大学社会科学研究所教授)は「韓国の中産層を月収40万ウォンから150万ウォン程度の人々とし、専門管理職・新中産層(ホワイトカ

2. 調査の概要

(1) 調査方法

設問紙を作成し²⁴⁾、1987年8月の1か月間に知人を通して大都市圏であるソウル市とその近郊（以下、ソウル市とする）、および地方都市である光州市のアパート団地に居住する人に配布し、回収した。都市アパート居住者を対象としたのは、一つに彼らが中産層とほぼ重なってくるからである²⁵⁾。韓国のアパートはふつう25坪くらいの広さをもっており、家賃の支払いも「伝賃」といい予めかなりの金額を所有者に預けるか買取であり、アパートに居住するには一定の資金がなければならない。二つには、短い期間にまとめてアンケートを回収できるという現実的理由からである。

アンケートの配布は、標本抽出に問題があるとはいえ、韓国社会ではこうした調査がまだ広く普及しておらず、多い人で50部、少ない人で10部を、ソウル市では10人、光州市では4人の知人に依頼するという形をとり、ソウル市では300部を配布し245部を回収、光州市では100部を配布し84部を回収した。

(2) 調査対象

配布したアンケートは、できるだけ世帯主に記入してもらい、代りに記入する場合も世帯主の立場で記入してもらうよう指示をした。

調査対象者についての基礎的事項としては、姓名、本貫（氏族発祥の地名）、年齢、兄弟中の順位、故郷、世帯員数、家族構成（核家族か父母同居か）、宗教、学歴、長男の場合長孫（宗家の長男）か、故郷を離れた時代、故郷に住む親戚について質問した。

その結果、次のような属性をもつ人々が調査対象となった（表1）。

- a. 年齢：40代、ついで30代が多く、両者を合わせると68.7%を占める。
- b. 長男か否か：長男の割合は42.3%であり、長男でありかつ長孫は全体の17.9%である。
- c. 世帯人員：四人世帯が最も多く（38.9%）平均世帯人員は、4.4人である。

ㄱ. ラー・旧中産層（中小企業主や家主など）に独立自営農民と労働者の一部を加えて約60%が程度が中産層といえ、彼らはオピニオンリーダーであり、その社会的影響力は70, 80%にもなる」[毎日新聞 1987.7.5]と述べている。韓国の中産層については、[ソウル大学校社会科学研究所：1987b]にその自画像が描かれている。

24) 設問紙の作成にあたっては金良柱君（東京大学大学院学生）に助言を得た。記して感謝する。アンケートの質問事項は出来るだけ少なくし、選択肢は3つ程度にして、その他の項にできるだけ記入してもらうように考えた。

25) 調査対象となったアパート団地は、ソウル市では新興住宅地である江南区、江東区が中心であり、近郊都市はソウル市の衛星都市である果川市と安養市にあるアパート団地である。光州市では市全域から8か所のアパートが選ばれた。

ソウル市でのアンケート配布についてより具体的には、拙稿[朝倉 1988]を参照されたい。

表1 調査対象者の属性

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
a. 年 齢 別				
無 回 答	22	6.7	22	6.7
20 代	22	6.7	44	13.4
30 代	111	33.7	155	47.1
40 代	115	35.0	270	82.1
50 代	44	13.4	314	95.4
60 代	14	4.3	328	99.7
70 代	1	0.3	329	100.0
b. 長男か否か				
無 回 答	20	6.1	20	6.1
長 孫	59	17.9	79	24.0
長 男	80	24.3	159	48.3
次男以下	170	51.7	329	100.0
c. 世帯人員別				
無 回 答	33	10.0	33	10.0
1 人	1	0.3	34	10.3
2 人	20	6.1	54	16.4
3 人	31	9.4	85	25.8
4 人	128	38.9	213	64.7
5 人	58	17.6	271	82.4
6 人	36	10.9	307	93.3
7 人	16	4.9	323	98.2
8 人	4	1.2	327	99.4
9 人以上	2	0.6	329	100.0
d. 核家族か同居か				
無 回 答	28	8.5	28	8.5
核 家 族	240	72.9	268	81.5
父 母 同 居	61	18.5	329	100.0
e. 宗 教 別				
無 回 答	20	6.1	20	6.1
無 宗 教	155	47.1	175	53.2
改 新 教	81	24.6	256	77.8
天 主 教	30	9.1	286	86.9
仏 教	35	10.6	321	97.6
圓 仏 教	4	1.2	325	98.8
儒 教	4	1.2	329	100.0
f. 学 歴 別				
無 回 答	43	13.1	43	13.1
中 学 校 卒	5	1.5	48	14.6
高 校 卒	44	13.4	92	28.0
専門大学卒	3	0.9	95	28.9
大学中退	9	2.7	104	31.6

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
大 学 卒	195	59.3	299	90.9
大 学 院 卒	30	9.1	329	100.0
g. 都市居住歴別				
無 回 答	2	0.6	2	0.6
本 人 代	144	43.8	146	44.4
父 代	137	41.6	283	86.0
祖 父 代	18	5.5	301	91.5
先祖代々	28	8.5	329	100.0
h. 地 域 別				
ソウル市	245	74.5	245	74.5
光州市	84	25.5	329	100.0

- d. 核家族か父母同居か：核家族が72.9%を占める。
- e. 宗教：無宗教47.1%，改新教（プロテスタント）24.6%，天主教（カトリック）9.1%，仏教10.6%，圓仏教（仏教系新興宗教の一つ）1.2%，儒教1.2%である。
これはソウル市の宗教別人口比率と比べ、キリスト教信者の比率はやや高く、仏

表2 祭祀の有無について

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
① 祭祀の有無				
祭祀を行なっている	96	29.2	96	29.2
祭祀を行っていない	233	70.8	329	100.0
② 誰が祭祀を行なっていますか				
無 回 答	1	1.0	1	1.0
本 人	78	81.3	79	82.3
父 以 上	12	12.5	91	94.8
兄 弟	5	5.2	96	100.0
③ いつ祭祀を行ないますか				
名 節	8	8.3	8	8.3
名 節 + 忌 日	39	40.6	47	49.0
名 節 + 忌 日 + 時 祭	6	6.3	53	55.2
忌 日	40	41.7	93	96.9
忌 日 + 時 祭	3	3.1	96	100.0

表3 調査対象者の属性別祭祀の有無比率

	N (人)	祭祀を行 っている (%)	行なってい ない (%)		N (人)	祭祀を行 っている (%)	行なってい ない (%)
a. 年 齢 別							
無 回 答	22	54.55	45.45				
20 代	22	13.64	86.36	} 20, 30代	133	15.04	84.96
30 代	111	15.32	84.68				
40 代	115	33.91	66.09	} 40 代	115	33.91	66.09
50 代	44	40.91	59.09				
60 代	14	50.00	50.00				
70 代	1	0.00	100.00	} 50代以上	59	42.37	57.63
b. 長男か否か							
無 回 答	20	50.00	50.00				
長 孫	59	50.85 (30人)	49.15 (29人)				
長 男	80	35.00 (28人)	65.00 (52人)				
次男以下	170	16.47 (28人)	83.53				
c. 世帯人員別							
無 回 答	33	45.45	54.55				
1 人	1	0.00	100.00				
2 人	20	25.00	75.00				
3 人	31	9.68	90.32				
4 人	128	19.53	80.47				
5 人	58	36.21	63.79	。			
6 人	36	47.22	52.78				
7 人	16	50.00	50.00				
8 人	4	50.00	50.00				
9 人以上	2	0.00	100.00				
d. 核家族か父母同居か							
無 回 答	28	50.00	50.00				
核 家 族	240	21.67	78.33				
父 母 同 居	61	49.18	50.82				
e. 宗 教 別							
無 回 答	20	50.00	50.00				
無 宗 教	155	29.68	70.32	} 無 宗 教	155	29.68 (46人)	72.32
改 新 教	81	17.28	82.72				
天 主 教	30	33.33	66.67	} キリス ト 教	111	21.62 (24人)	78.38 (87人)
仏 教	35	45.71	54.29				
圓 仏 教	4	0.00	100.00				
儒 教	4	0.00	100.00	} そ の 他	43	37.21 (16人)	62.79
f. 学 歴 別							
無 回 答	43	51.16	48.84				
中 学 校 卒	5	40.00	60.00				
高 校 卒	44	18.18	81.82	} 中・高卒	49	20.41	79.59

	N (人)	祭祀を行な っている (%)	行なってい ない (%)		N (人)	祭祀を行な っている (%)	行なってい ない (%)
専門大学卒	3	66.67	33.33	専門大・ 大学中退 大卒・大 学院卒	12	25.00	75.00
大学中退	9	11.11	88.89				
大学卒	195	28.21	71.79				
大学院卒	30	20.00	80.00				
g. 都市居住型別							
無回答	2	0.00	100.00				
本人代	144	28.47	71.53				
父代	137	31.39	68.61				
祖父代	18	16.67	83.33				
先祖代々	28	32.14	67.86				
h. 地域別							
ソウル市	245	27.76	72.24				
光州市	84	33.33	66.67				

- 教信者の比率が低いが、全体としてその比率分布は大きく違ってはいない²⁶⁾。
- f. 学歴：大学卒以上が68.4%であり、全般に教育水準が高い。
- g. 都市の居住歴：本人の代から、ついで父の代からが多く、両者を合わせると85.4%を占める。

3. 調査結果

以下、ほぼ同時期にソウル市内の中学生の学父母355名を対象に行なった Seo Pong

26) 1983年現在の全国およびソウル市の人口に対する宗教別信徒比は、次の表のようである。
表 宗教別信徒数

	全 国				ソ ウ ル 市			
	信徒数 Xi	宗教人口対信徒数 $\frac{Xi}{\sum Xi}$	総人口対信徒数 $\frac{Xi}{A}$		信徒数 Yi	宗教人口対信徒数 $\frac{Yi}{\sum Yi}$	総人口対信徒数 $\frac{Yi}{B}$	
仏 教	7,507,059	48.16	18.92		1,714,647	39.05	18.13	
改 新 教	5,337,308	34.24	13.45		1,938,595	44.15	20.50	
天 主 教	1,590,625	10.2	4.00		559,755	12.75	5.92	
儒 教	786,955	5.04	1.98		95,505	2.18	1.01	
圓 仏 教	96,333	0.61	0.24		23,873	0.54	0.25	
天 道 教	52,530	0.33	0.13		17,360	0.40	0.18	
そ の 他	216,809	1.38	0.54		40,718	0.93	0.43	
計	15,587,619 $\sum Xi$	100.	39.29 $\sum Xi/A$		4,390,453 $\sum Yi$	100.	46.43 $\sum Yi/B$	

全国人口数 (A): 39,669,859 (1983. 10. 1. 現在)
ソウル人口数 (B): 9,454,825 (1983. 11. 現在) [世界年鑑より]
N.B. 1) 信徒数は1983. 10. 1. 市、道常住人口調査時に集計された宗教人口を基準としたものである。
2) 資料出处：文化会報部《韓国宗教便覧》1984 p. 762.

Ja の調査報告 [Seo 1987] を参照しながら、本調査の結果について概要を記していく。

A. 祭祀の実態

(1) 祭祀の有無

はじめに、都市アパートにおいてどのぐらい祖先祭祀が行なわれているかを調べてみた。

＜Q. あなたは現在住んでいるアパートで祭祀を行なっていますか？＞

「行なっている」が96例 (29.2%)、「行なっていない」が233例 (70.8%) であった (表2-①)。Seo がソウル市内の中学生学父母を対象に行なった調査での「祭祀を行なう」56%、「行なわない」44%という結果に比べると、祭祀を行なう比率が低いが、アパート居住者に限定したこと、世帯主の年齢が30・40代が多くその父がまだ健在であるためと考える。

そこで、祭祀の有無を調査対象者の属性との関連でみてみよう (表3)。

- a. 年齢別では20代から60代まで年代が上がるとともに祭祀有の比率が高くなっている。50代以上では42.4%が祭祀を行なっている。
- b. 長孫は50.9%、長男は35.0%が祭祀有であるが、次男以下は16.5%である。
- c. 世帯人員数別では、3人世帯から8人世帯まで世帯人員数が増加するほど祭祀有の比率が高くなる。
- d. 核家族か父母同居かでは、祭祀有が核家族では21.7%であるのに対して父母同居では49.2%である。
- e. 宗教別では、祭祀有の比率が、無宗教は全体の平均とほぼ同じ (29.7%) であり、改新教はそれより低く (17.3%)、天主教 (33.3%) と仏教 (45.7%) は高い。なお、改新教では追悼式という形で行なうものも含まれている²⁷⁾。改新教と天主教を合わせたキリスト教全体では21.6%、その他の宗教の全体では37.2%が祭祀を行なっている。
- f. 学歴別ではほとんどが高学歴であり類別してみることが難しいが、中・高卒と大学・大学院卒とを比較すると、高学歴の方がわずかながら祭祀を行なう比率が高くなる。
- g. 都市居住歴別でもほとんどが本人ないし父の世代からであり類別してみることが難しいが、祖父の代からで祭祀有の比率が少し低いとはいえ居住歴別による差はないといえよう。

27) 現実には追悼式もかなり多様な形態を持っているようである。しかもそれらは追悼式による儒教祭祀の要素の受容の形態をとっている [坂元 1984: 86]。

表4 忌 祭 に つ い て

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
①忌日の祭祀は何代まで行な いますか				
無 回 答	1	1.0	1	1.0
父 母 の み	19	19.8	20	20.8
祖 父 母 の 代 ま で	41	42.7	61	63.5
曾 祖 父 母 の 代 ま で	21	21.9	82	85.4
高 祖 父 母 の 代 ま で	12	12.5	94	97.9
そ の 他	2	2.1	96	100.0
②忌日の祭祀はどのように行 ないますか				
無 回 答	1	1.0	1	1.0
祖先の亡くなった日にす べて別々に	74	77.1	75	78.1
夫 婦 合 祀 で	17	17.7	92	95.8
そ の 他	4	4.2	96	100.0
③祭祀床はどのように供えて いますか				
無 回 答	1	1.0	1	1.0
極 め て 簡 素 に	14	14.6	15	15.6
伝統的祭祀のあり方を守 って	20	20.8	35	36.5
礼法を守り祭需は簡単に	59	61.5	94	97.9
そ の 他	2	2.1	96	100.0
④一年に祭祀に使う費用はど の程度になりますか				
無 回 答	4	4.2	4	4.2
4万ウォン以下	4	4.2	8	8.3
5～9万ウォン	14	14.6	22	22.9
10～19万ウォン	27	28.1	49	51.0
20～29万ウォン	16	16.7	65	67.7
30～49万ウォン	20	20.8	85	88.5
50万ウォン以上	11	11.5	96	100.0
⑤一年に何回の忌祭を行な いますか				
1 回	1	1.0	1	1.0
2 回	15	15.6	16	16.7
3 回	22	22.9	38	39.6
4 回	15	15.6	53	55.2
5 回	20	20.8	73	76.0
6 回	7	7.3	80	83.3
7 回	10	10.4	90	93.7
8 回	1	1.0	91	94.8
9 回 以 上	5	5.2	96	100.0

h. 地域別では、祭祀有の比率はそれぞれソウル市が27.7%, 光州市が33.3%と、光州市がわずかに高いが大きな差はない。

祖先祭祀の有無については、予想されるように、高年令、長男(ことに長孫)、父母同居、非キリスト教という属性をもつ人に祭祀を行なっている比率が高い。

ここで祭祀を行なっている96例について、その内容をみてみよう(表2)。

<Q. 誰が祭祀を行なっていますか?>

本人が行なっているのが全体の81.3%である。これは核家族の割合が高いことと関連し、父や兄との同居が少ないため祭祀を行なう場合には本人が行なうことになる。

つぎに、忌日、名節、時祭のいずれの祭祀が行なわれているかを調べた。

<Q. いつ祭祀を行ないますか?>

忌日に祭祀を行なうのは91.7%と大部分の人が忌祭を行ない、名節には55.2%と過半数の人が茶礼を行なっているが、時祭は9.4%の人が行なっているにすぎない。

(2) 忌祭(表4)

忌祭の対象について

<Q. 忌日の祭祀は何代まで行ないますか?>

父母・祖父母の代まで行なうのが62.5%を占めているが、曾祖父母・高祖父母まで行なうのが34.4%あり、この数字と長孫である人の割合(31.3%)を考えると祭祀されるべき人についてきちんと祭祀が行なわれているとみることができよう。

これを確認するために合祀について調べてみた。

<Q. 忌日の祭祀はどのように行ないますか?>

「各忌日にそれぞれ行なう」のが77.1%であるのに対して、「夫婦の合祀を行なう」のが17.7%とかなり高い率を示している。ただ、これは夫婦両位を合祀することと合設することを誤解している可能性も考えられる。

この他、「祖父の代以上を父の祭祀に合祀する」という例が2例、「名節の時にまとめて合祀する」という例が1例記載されている。

忌祭の祀り方について

<Q. 祭祀床はどのように供えていますか?>

「伝統的祭床のあり方を守って」が20.8%であるのに対して、「きわめて簡素に」が14.6%であり、「礼法は守り祭需は簡単に」という中間的な立場が61.5%と最も多い。その他の項に、「陳設しない」と記載されたのが2例ある。Seoの調査でも、「伝統的な慣例による」が35%、「故人の好きだったもの」が7%、「都合による」が58%と、ほぼ同ような傾向を示している。

表5 茶礼(名節祭祀)について

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
名節の時の祭祀はどのように 行ないますか				
無 回 答	1	1.0	1	1.0
家で家族のみ簡略に	42	43.8	43	44.8
兄弟たちも集まり一緒に	44	45.8	87	90.6
平素会えない親戚まで集ま り	8	8.3	95	99.0
そ の 他	1	1.0	96	100.0

表6 宗親会について

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
①あなたの門中には宗親会、 花樹会のような組織があり ますか				
無 回 答	3	3.1	3	3.1
あ る	74	77.1	77	80.2
な い	19	19.8	96	100.0
②そうした組織に集まる人は 大体何人になりますか				
無 回 答	34	35.4	34	35.4
1 ～ 19 人	6	6.3	40	41.7
20 ～ 49 人	17	17.7	57	59.4
50 ～ 99 人	19	19.8	76	79.2
100人以上	20	20.8	96	100.0
③あなたはそうした門中組織 が行なう行事に参加します か				
無 回 答	12	12.5	12	12.5
欠かさず参加する	13	13.5	25	26.0
時々参加する	47	49.0	72	75.0
参 加 し な い	24	25.0	96	100.0

表7 墓について

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
墓(山所)はどこにありますか				
無 回 答	3	3.1	3	3.1
先 山	75	78.1	78	81.3
家 族 墓 地	8	8.3	86	89.6
共 同 墓 地	10	10.4	96	100.0

<Q. 一年に祭祀に使う費用はどの程度になりますか？>

一年間の費用としては、4万ウォン以下から50万ウォン以上まで幅があり、最大は200万ウォンである。その頻度もばらついており、家によってかなりの違いがみられる。これは祭祀の回数によっても違いがでてくるが、都市中産階層の年収のなかで²³⁾年に50万ウォン以上使うというのは、かなり祭祀に力を注いでいるといえる。また逆に4万ウォン以下というのは徹底して簡素化している家もあることを示している。

一回の祭祀にどのぐらいの費用がかかっているかを知るため、次の質問と重ね合わせてみた。

<Q. 一年に何回の忌祭を行ないますか？>

年に1回から最も多い家では12回まで、その頻度もばらばらである。

一回の費用としては、「3万ウォン以下」が17%、「5万ウォン以下」が13%、「5万ウォン以上」が41%、「10万ウォン以上」が25%、「20万ウォン以上」が3%であり、だいたい5万ウォンから10万ウォン前後が多いが、家によってかける経費にかなりのばらつきがみられる。なお、Seoの調査結果、「1万ウォン以下」が8%、「3万ウォン以下」が48%、「5万ウォン以下」が33%、「5万ウォン以上」が11%という数字に比べると、全体としてはかなり経費をかけている。

(3) 茶礼(名節祭祀)(表5)

名節時には、どのような人々が集まって祭祀が行なわれているのかを調べてみた。

<Q. 名節の時の祭祀はどのように行ないますか？>

「家族のみ」が43.8%、「兄弟たちも集まって」が45.8%、「平素会えない親戚までも集まって」というのはわずか8.3%であった。

(4) 門中の宗親会・花樹会(表6)

<Q. あなたの門中には宗親会・花樹会のような組織がありますか？>

「ある」が77.1%、「ない」が19.8%であった。

<Q. そうした組織に集まる人は大体何人になりますか？>

20人以下から100人以上(300~400名が数例で最大は700名)まで様々な規模の組織がある。

<Q. あなたはそうした門中組織が行なう行事に参加しますか？>

「かかさず参加」が13.5%、「時々参加」が49.0%、「参加しない」が25.0%であった。

(5) 墓(表7)

<Q. 墓(山所)はどこにありますか？>

表8 祭祀を行っていない人

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
①あなたが現在住んでいるアパートで祭祀を行わない理由は何ですか				
無 回 答	8	3.4	8	3.4
宗教的な理由で	33	14.2	41	17.6
アパート構造と生活が祭祀を行なうのに適当でない	3	1.3	44	18.9
現代生活が祭祀を行なうのに合わない	3	1.3	47	20.2
祭祀の担当ではない	182	78.1	229	98.3
そ の 他	4	1.7	233	100.0
②あなたが現在住んでいるアパートではないどこで祭祀を行なっていますか				
無 回 答	15	6.4	15	6.4
父 母 の 家	98	42.1	113	48.5
兄 弟 の 家	80	34.3	193	82.8
親 戚 の 家	27	11.6	220	94.4
寺	1	0.4	221	94.8
そ の 他	12	5.2	233	100.0
③あなたはそこの祭祀にどの程度参加していますか				
無 回 答	17	7.3	17	7.3
名節, 忌祭すべて必ず行く	96	41.2	113	48.5
名節の時のみ, 必ず行く	36	15.5	149	63.9
忌祭の時のみ行く	10	4.3	159	68.2
都合により, 一定ではない	65	27.9	224	96.1
ほとんど行かない	9	3.9	233	100.0

「先山（祖先それぞれの墳墓のある土地）」が78.1%、「家族墓地」が8.3%、「共同墓地」が10.4%であった²⁸⁾。「先山」にあるのが大部分であり、その祖先の祭祀を行なうためには、地方から都市に出てきた人にとってはわざわざ帰郷しなければならない。

B. 祭祀を行っていない人（表8）

(1) 祭祀をしない理由

<Q. あなたが現在住んでいるアパートで祭祀を行わない理由は何ですか？>

「宗教的理由で」は14.2%であり、「アパート構造と生活が祭祀を行なうのに適当で

28) 韓国では墓地占有面積が国土の約1.5%と推定され、国土利用計画と地域開発の阻害要因となっている。このため墓地制度に関して、政府でもその改善対策を推進しようとしているが、必ずしも実効はあがっていない[趙宗植 1987]。

表9 祭祀への態度

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
①長男祭祀についてどのように考えますか				
無 回 答	14	4.3	14	4.3
必ず長男がしなければなら ない	132	40.1	146	44.4
兄弟たちが分けてしても よい	159	48.3	305	92.7
姉妹たちも分けてしてよ い	8	2.4	313	95.1
そ の 他	16	4.9	329	100.0
②妻家の祭祀はどのようにし ていますか				
無 回 答	15	4.6	15	4.6
参席している	57	17.3	72	21.9
参席する必要があれば参 席してもかまわない	198	60.2	270	82.1
参席する必要はない	39	11.9	309	93.9
そ の 他	20	6.1	329	100.0
③万一娘しかいない場合祭祀 はどのようにしたらいいで しょうか				
無 回 答	15	4.6	15	4.6
祭祀を婿に頼んでもかま わない	222	67.5	237	72.0
必ず養子をとって祭祀を 続けて行なうようにする	22	6.7	259	78.7
祭祀をしなくてもよい (仕方がない)	62	18.8	321	97.6
そ の 他	8	2.4	329	100.0
④祖父母の祭祀の場合、長男 が死亡した時に孫よりも兄 弟たち(次男以下)が行なう ことについてどのように考 えますか				
無 回 答	12	3.6	12	3.6
よいと考える	196	59.6	208	63.2
直系長孫がしなければな らない	84	25.5	292	88.8
どちらでもよい	33	10.0	325	98.8
そ の 他	4	1.2	329	100.0
⑤祭祀することについて				
a. 伝統的な美風良俗なので 必ず行なわなければならない				
無 回 答	14	4.3	14	4.3
は い	149	45.3	163	49.5
い い え	166	50.5	329	100.0

	FREQUENCY	PERCENT	CUMULATIVE FREQUENCY	CUMULATIVE PERCENT
b. 子女の教育においても助けになるので必要である				
無 回 答	14	4.3	14	4.3
は い	145	44.1	159	48.3
い い え	170	51.7	329	100.0
c. 現代生活において経済的損失が多く簡素化させるのがよい				
無 回 答	14	4.3	14	4.3
は い	112	34.0	126	38.3
い い え	203	61.7	329	100.0

ない」「現代生活が祭祀を行なうのに合わない」という理由はそれぞれ1.3%にすぎなかった。「長男ではない」「父の家で行なっている」など祭祀の担当ではないという理由を示したのが、全体の78.1%であった。これは、「キリスト教を信じるため」31%、「長男でないため」62%、「その他」7%というSeoの調査に比べると、宗教的理由をあげるものの割合が低い。

<Q. あなたが現在住んでいるアパートではないどこで祭祀を行なっていますか？>

「父母の家」「兄弟の家」「親戚の家」が合わせて88.0%であり、「寺」が1例、その他の項12例の中には「教会」「聖堂」と記載したのが多い。

(2) 故郷との関係

<Q. あなたはそこでの祭祀にどの程度参加していますか？>

「名節、忌祭、すべて必ず行く」は41.2%であるが、「ほとんど行かない」3.9%を除く9割以上の人、いずれかの祭祀には都合がつけば故郷に行っていることになる。いずれか一つの祭祀に行く人の中では、祭日である「名節の時だけ行く」(15.5%)という人が最も多く、「時祭の時だけ行く」という例は1例もない。

C. 祭祀への態度(表9)

(1) 長男祭祀について

<Q. 長男祭祀についてどのように考えますか？>

「必ず長男がしなければならない」という伝統的なあり方を支持するのが40.1%、「兄弟が分けてもよい」と妥協するのが48.3%あるが、「姉妹も分けてよい」とするのは2.4%と少ない。その他の項(16例)には、「事情・都合による」という意見が最も多く、「全く行なわないのがよい」「兄弟姉妹全員で行なえば負担も少なく、その紐帯も強まる」「長男が移民したため次男が行なう」などがある。

(2) 妻家の祭祀

<Q. 妻家の祭祀はどのようにしていますか？>

すでに「参席している」という人が17.3%もいるが、「参席する必要はない」と伝統保守的な意見をもつ人も11.9%いる。「参席する必要があれば参席してもよい」という融通性をもつ意見が60.2%と大勢になっている。その他の項（20例）には、「妻家がキリスト教のため祭祀がない」が大部分で、「妻がよく行く」「国際結婚のため祭祀がない」などがある。

(3) もし娘しかいない場合

<Q. 万一娘しかいない場合、祭祀はどのようにしたらいいでしょうか？>

「必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする」と伝統的なあり方に固執するのは6.7%と少なく、「祭祀を婿（娘の夫）に頼んでもかまわない」が67.5%、「祭祀をしなくてもよい（仕方がない）」が18.8%と、現実の状況に対応すべきという意見が多い。その他の項（8例）には、「娘がする」がほとんどで、「婿が望まなければ宗教機関に預ける」という意見もある。

(4) 祖父母の祭祀

<Q. 祖父母の祭祀の場合、長男が死亡した時に、孫よりも長男以外の兄弟たち（次男以下）が行なうことについてどのように考えますか？>

「直系長孫がしなければならぬ」という伝統保守的な意見が25.5%と四分の一を占めているが、「よいと思う」59.6%、「どちらでもよい」10.0%と必ずしも直系長孫にこだわらないという意見が大勢を占めてきている。

(5) 祭祀をすることについて

以上の意見に対して、該当すると思うものすべてに表示するようにした。

<a. 伝統的な美風良俗なので必ず行なわなければならない>

「肯定」が45.3%、「否定」が50.5%と、ほぼ半々の意見であった。

<b. 子女の教育においても助けとなるので必要である>

「肯定」が44.1%、「否定」が51.7%と、これもほぼ半々の意見であった。

<c. 現代生活において経済的損失が多く簡素化させるのがよい>

「肯定」が34.0%、「否定」が61.7%と、簡素化に対しては否定的な意見の方が多いになっている。

<d. その他>

その他の項に記載された意見をみると、「家族・親族のルーツを認識する」「家族・親族の和睦のため」「心理的安定と自らが進むべき方向を提示する原動力」といった

祭祀の機能を肯定的にとらえる意見があり、「父母あるいは祖父母の祭祀までは必ず行なうが簡素化して負担をなくす」「祭祀が必要なのではなく、故人を追慕する心が大切」「伝統的祭祀は迷信的要素と生者の気分的欲求が強く、外的・内的に健全な変化が望まれる」といった祭祀のあり方を改革すべきという意見もある。

ここで祭祀の態度についてまとめ、今後の予測をしてみると、

上記項目のなかで、伝統的なあり方を固持しようとする態度が最も強く維持されているのは(1)における「長男祭祀において必ず長男が行なう」の40.1%であり、次が(4)における「祖父母の祭祀において長孫が行なう」の25.5%であり、伝統的あり方を固持しようとする態度が希薄なのは(3)における「娘しかいない場合において養子をとる」の6.7%と(2)における「妻家の祭祀には参席する必要なし」の11.9%である。しかし、前者の(1)(4)において、その比率はいずれも過半数にも達しておらず、「兄弟に分けて」(48.3%)、「次男以下が」(59.6%)という修正的意見の方が勝っている。一方、後者の(3)(2)においても「娘しかいない場合において祭祀をしなくてもよい」(18.8%)と「妻家の祭祀において参席している」(17.3%)という伝統的あり方に否定的な意見が多数を占めているわけでもない。新しい方向に改善すべきであるという積極的意見が多いわけでもなく、中間的な態度が多い。全体としては、状況に既応しながらという観が強い。

「祭祀をすることについて」では、理由にかかわらず「必ず行なわなければならない」あるいは「必要である」という意見には、わずかではあるがそう思わない人が過半数を越えているのに、「簡素化」に対してはむしろ否定的な意見の方が多くなっている。この一見矛盾した数字が、伝統的祖先祭祀を固持することについて積極的に肯定はしえないが、同時に積極的に否定もしえないという現在の状況を示しているといえよう。

Seo の調査では「今後続けて祭祀を行なうか」という問いに対して、「行なう」が89%、「わからない」が6%あり、「行なわない」は5%にすぎない。また「祭祀を行なう理由」については、「祖先の霊をたたえ恩功に報答するため」が69%、「伝統的な慣習だから」が21%、「親戚間の和睦のため」が5%、「子女の教育のため」が4%となっている。おそらくは「祖先の霊をなぐさめる」という韓国社会にあって強く根ざした儒教の「孝」の精神はなお生き続け、今後もなんらかの形で祖先の祭祀は行なわれていくにちがいない。しかし、社会の変化にともない伝統的な祖先祭祀のあり方は徐々に現実の社会条件に適応した形に修正されていき、またその目的も人々の認識の中では、本来の祖先の祭祀から生者の親睦や福祉へと変化していくことが考えられる。

D. 調査対象者の属性別にみた祭祀への態度（表10）

(1)長男祭祀について、(2)妻家の祭祀について、(3)もし娘しかない場合、(4)祖父母の祭祀について、および(5)祭祀をすることについて、それぞれ調査対象者の属性別になんらかの違いがあるかを調べてみた。この一次的クロス集計で分布の間に差があるか χ^2 検定を行なったが、サンプル数も少なく、全体としては統計的に有意な差はみられなかった。ここでは言及すべきと思われる部分的な差についてのみ記しておく。

a. 年齢別：年令を10代ごとに分類しても細分化されすぎるので、20・30代と40代と50代以上に3分類した。

(1)について、40代および50代以上は20・30代に比べて「必ず長男がすべきである」という比率が高い(45.2%・45.8%/33.1%)。(2)について、「妻家の祭祀に参席している」という比率が20・30代では12.8%，50代以上では15.3%であるのに対して、40代では25.2%と高くなっている。20・30代では妻家で参席すべき祭祀が少ないことを考えると、40代の数字から今後は妻家の祭祀に参席する方向へと変化していくと予測される。(3)については、50代以上で「必ず養子をとるべき」とする比率(13.6%)が、全体の比率(6.7%)に比して高い。(4)については、「長孫がすべき」とする比率が、20・30代(18.1%)に比して、40代(31.3%)および50代以上(30.5%)が高い。(5)については、「美風良俗である」として祭祀を肯定するものが、20・30代(38.4%)に比して、40代(53.0%)および50代以上(54.2%)が高く、「子女の教育のために祭祀が必要である」とするのは、20・30代(41.4%)および40代(41.7%)に比して、50代以上(49.2%)が高い。

このように高い年代になるにしたがって伝統保守的である傾向が強いが、40代では項目によって伝統保守的な意見と伝統に否定的な意見とがみられる。また年令による意見の違いは個人にあっては年令とともに意見は変わりうるものであり、現在20代の人も年令を重ねて現在とは違った意見になることもあり、その人たちが40・50代になった時に大勢が伝統に否定的状況になっているとは一概にはいえない。

b. 長男可否か：

(1)について、長孫は「必ず長男がすべきである」という比率(45.8%)が「兄弟に分けてもよい」という比率(40.7%)より多いが、次男以下は逆に前者(35.9%)より後者(52.4%)のほうが比率が高い。(5)については、長男および長孫は「子女の教育のため祭祀が必要である」という意見についてどちらかといえば肯定的な比率のほう(58.8%・47.5%)が高いのに対して、次男以下は否定的な比率のほう(59.4

%)が高い。このような差はあるが、全体として長男か否かによっては、祭祀に対する態度はあまり変わらないといえよう。

c. 世帯人員数別：

世帯の人員別により祭祀への態度は変わらない。また、人員別ではあまりに細分化されるため、一般的に核家族より父母同居の方が世帯人員が多いものとして、次の項目と合わせてみることにする。

d. 核家族か父母同居か：

核家族か父母同居かの違いによる祭祀への態度の違いはほとんどない。ただし(5)において、父母同居では「子女の教育のため祭祀が必要である」(52.5%)が「否」(44.3%)より比率が高いのに対して、核家族では逆(40.8%/55.0%)である。父母同居にあって祖父母が孫に教育することと関係するのであろう。

e. 宗教別：キリスト教の特性をみるため、無宗教とキリスト教(天主教・改新教)とその他の宗教に3分類した²⁹⁾。

キリスト教徒は、無宗教・他の宗教の人に比べて、(1)において「兄弟に分けてもよい」(53.2%/47.7%・37.2%)、(3)において「祭祀をしなくてもよい」(26.1%/15.5%・14.0%)、(4)において「直系長孫がしなくてもよい」(75.7%/70.3%・48.8%)と、それぞれの比率が高い。(5)においては、無宗教および他の宗教の人に比べて「美風良俗であり祭祀をすべき」というのに対しては否定的な意見(62.2%/47.7%・20.9%)が強いが、「子女の教育のため祭祀が必要である」、「簡素化すべき」という意見に対する賛否はほぼ同じ比率である。

f. 学歴別：大部分が高学歴であり、学歴別による祭祀への態度の違いは明らかではないが、一応、中学・高校卒と大学・大学院卒とを対比させてみた。

そこでは、中学・高校卒の方が大学・大学院卒に比しては、(1)において「必ず長男がすべきである」(51.0%/37.3%)、(3)において「必ず養子をとるべき」(14.3%/2.2%)、(4)において「直系長孫がするべき」(30.6%/22.7%)とする比率がそれぞれ高く、伝統保守的といえる。また(5)において、「美風良俗であり祭祀をすべき」とするものが、中・高校卒(61.2%)のほうが大学・大学院卒(42.7%)よりも比率が高い。

29) 天主教と改新教とでは、伝統的祭祀に対する立場の違いがあることも予想されたが、調査結果においては「子女の教育のため祭祀が必要である」という意見に天主教の信者は肯定するものが多い(66.7%)のに対して改新教の信者は否定するものが多い(60.5%)という違いはあるが、それ以外の項目についてはほぼ同じ態度・意見である。また、天主教のサンプル数が30と少ないこともあり、天主教と改新教を合わせて、キリスト教としてその特性をみた。

g. 都市居住歴別：

大部分が本人ないしは父の代から都市に居住するものであり、都市居住歴別による祭祀への態度の違いは明らかではない。本人の代からと父の代からとではほとんど違いがないが、(5)において本人の代からのほうが父の代からより、「美風良俗であり祭祀をすべき」(50.7%/42.3%)、「子女の教育のため祭祀が必要」(50.0%/38.0%)という意見に対して、肯定的にとらえている比率が高い。祖父の代からあるいは代々の都市居住者の事例数が少ないため確かなことはいえないが、都市に古くから居住している家の人のほうが、本人あるいは父の代から都市に居住するようになった人より、どちらかといえば伝統に対して否定的なようである。

h. 地域別：

ソウル市と光州市では、(3)において「必ず養子をとるべき」とする比率(4.1%/14.3%)と「祭祀をしないでもよい」とする比率(22.0%/9.3%)に違いがみられ、光州市のほうがより伝統保守的ではある。(5)において、光州市では「美風良俗であり祭祀をすべき」、「子女の教育のため祭祀が必要」というのにも肯定的意見が否定的意見より多いが、ソウル市では逆になっている。ただし、「簡素化すべき」という意見も光州市がソウル市よりもその比率が高い。このように地方都市である光州市のほうが大都市圏のソウル市よりやや伝統保守的な傾向はみられるが、それも顕著な相違ではない。

i. 祭祀の有無別：

祭祀を行なっているか行なっていないかによる違いは、祭祀を行なっている人のほうが行なっていない人よりは、(1)において「必ず長男がすべき」(43.8%/38.6%)、(3)において「必ず養子をとるべき」という意見(11.5%/4.7%)が強い。また(5)においても祭祀を行なっている人のほうが、「美風良俗であり祭祀をすべき」、「子女の教育のため祭祀が必要」という意見に肯定する比率が高く、伝統的あり方を支持する傾向にある。

調査対象者の属性別に祭祀への態度について差があるかをみてきた。年令、宗教などによってある程度の相違がみられたが、特にある属性によってすべての事項に顕著な差が現れたり、一つの事項についても相対的な差を完全に越えるような相違というものはなかった。このことはそれぞれの属性においても祭祀に対して一定の明確な態度の決定がみられないことを意味していよう。

表10 調査対象者の属性別にみた祭祀への態度比率

a. 年 齢 別

	20, 30代	40 代	50代以上	無 回 答
(1) 長男祭祀について				
無 回 答	3.01	4.35	6.78	4.55
必ず長男がしなければならない	33.08	45.22	45.76	40.91
兄弟たちが分けてしてもよい	56.39	43.48	38.98	50.00
姉妹たちも分けてしてよい	3.01	0.87	3.39	4.55
そ の 他	4.51	6.09	5.08	0.00
(2) 妻 家 の 祭 祀				
無 回 答	5.26	3.48	6.78	0.00
参席している	12.78	25.22	15.25	9.09
参席する必要があるれば参席してもかまわない	58.65	59.13	57.63	81.82
参席する必要はない	15.78	6.96	13.56	9.09
そ の 他	7.52	5.22	6.78	0.00
(3) 娘しからない場合				
無 回 答	4.51	3.98	8.47	0.00
祭祀を婿に頼んでもかまわない	70.68	63.48	67.80	68.18
必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする	0.75	7.83	13.56	18.18
祭祀をしなくてもよい（仕方がない）	21.80	20.87	10.17	13.04
そ の 他	2.26	4.53	0.00	0.00
(4) 祖 父 母 の 祭 祀				
無 回 答	3.76	3.48	5.08	0.00
よいと考える	62.41	57.39	57.63	59.09
直系長孫がしなければならない	98.05	31.30	30.51	27.28
どちらでもよい	15.04	6.09	5.08	13.64
そ の 他	0.75	1.74	1.69	0.00
(5) 祭祀することについて				
a. 伝統的美風良俗				
無 回 答	3.76	3.48	6.78	4.55
は い	38.35	53.04	54.24	22.73
い い え	57.89	43.48	38.98	72.73
b. 子 女 の 教 育				
無 回 答	3.76	3.48	6.78	4.55
は い	41.35	41.74	49.15	59.09
い い え	54.89	54.78	44.07	36.36
c. 簡 素 化				
無 回 答	3.76	3.48	6.78	4.55
は い	39.10	30.43	35.59	18.18
い い え	57.14	66.09	57.63	77.27
N	133	115	59	22

b. 長男か否か

	長 孫	長 男	次男以下	無 回 答
(1) 長男祭祀について				
無 回 答	5.08	2.50	5.29	0.00
必ず長男がしなければならぬ	45.76	42.50	35.88	50.00
兄弟たちが分けてしてもよい	40.68	46.25	52.35	45.00
姉妹たちも分けてしてもよい	1.69	3.75	2.35	0.00
そ の 他	6.78	5.00	4.12	5.00
(2) 妻家の祭祀				
無 回 答	6.78	3.75	4.71	0.00
参席している	20.34	13.75	18.82	10.00
参席する必要があるれば参席してもかまわない	45.76	58.75	63.53	80.00
参席する必要はない	13.56	17.50	8.82	10.00
そ の 他	13.56	6.25	4.12	0.00
(3) 娘しかいない場合				
無 回 答	8.47	1.25	4.71	5.00
祭祀を婿に頼んでもかまわない	71.19	62.50	68.24	70.00
必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする	5.08	8.75	5.88	10.00
祭祀をしなくてもよい(仕方がない)	11.86	23.75	19.41	15.00
そ の 他	3.39	3.75	1.76	0.00
(4) 祖父母の祭祀				
無 回 答	8.47	1.25	3.53	0.00
よいと考える	59.32	56.25	60.00	70.00
直系長孫がしなければならぬ	22.03	30.00	25.29	20.00
どちらでもよい	6.78	10.00	11.18	10.00
そ の 他	3.39	2.50	2.50	0.00
(5) 祭祀することについて				
a. 伝統的美風良俗				
無 回 答	6.78	2.50	4.71	0.00
は い	40.68	48.75	47.65	25.00
い い え	52.54	48.75	47.65	75.00
b. 子女の教育				
無 回 答	6.78	2.50	4.71	0.00
は い	47.46	58.75	35.88	45.00
い い え	45.76	38.75	59.41	55.00
c. 簡素化				
無 回 答	6.78	2.50	4.71	0.00
は い	40.68	33.75	32.35	30.00
い い え	52.54	63.75	62.94	70.00
N	59	80	170	20

d. 核家族か父母同居か

	核 家 族	父 母 同 居	無 回 答
(1) 長男祭祀について			
無 回 答	3.34	3.28	3.57
必ず長男がしなければならない	39.17	44.26	39.29
兄弟たちが分けてしてもよい	48.75	45.90	50.00
姉妹たちも分けてしてよい	2.92	1.64	0.00
そ の 他	4.58	4.92	7.14
(2) 妻 家 の 祭 祀			
無 回 答	3.75	8.20	3.57
参席している	18.75	13.11	14.29
参席する必要があるれば参席してもかまわない	59.17	60.66	67.86
参席する必要はない	12.50	9.84	10.71
そ の 他	5.83	8.20	3.57
(3) 娘しかない場合			
無 回 答	3.04	4.92	7.14
祭祀を婿に頼んでもかまわない	66.67	68.85	71.43
必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする	6.67	4.92	10.71
祭祀をしなくてもよい（仕方がない）	19.58	19.67	10.71
そ の 他	2.92	1.64	0.00
(4) 祖 父 母 の 祭 祀			
無 回 答	3.33	4.92	3.57
よいと考える	59.58	55.74	67.86
直系長孫がしなければならない	27.08	22.95	17.86
どちらでもよい	9.17	14.75	7.14
そ の 他	0.83	1.64	3.57
(5) 祭祀することについて			
a. 伝統的美風良俗			
無 回 答	4.17	3.28	7.14
は い	46.25	47.54	32.14
い い え	49.58	49.18	60.71
b. 子 女 の 教 育			
無 回 答	4.17	3.28	7.14
は い	40.83	52.46	53.57
い い え	55.00	44.26	39.29
c. 簡 素 化			
無 回 答	4.17	3.28	7.14
は い	35.00	37.70	17.86
い い え	60.83	59.02	75.00
N	240	61	28

e. 宗 教 別

	無 宗 教	キリスト教	そ の 他	無 回 答
(1) 長男祭祀について				
無 回 答	1.94	6.31	9.30	0.00
必ず長男がしなければならない	43.87	30.63	46.51	50.00
兄弟たちが分けてしてもよい	47.74	53.15	37.21	50.00
姉妹たちも分けてしてよい	2.58	2.70	2.33	0.00
そ の 他	3.87	7.21	4.65	0.00
(2) 妻 家 の 祭 祀				
無 回 答	1.29	8.11	9.30	0.00
参席している	14.84	19.82	23.26	10.00
参席する必要があるれば参席してもかまわない	69.03	49.55	46.51	80.00
参席する必要はない	10.32	12.61	16.28	10.00
そ の 他	4.52	9.91	4.65	0.00
(3) 娘 じ かい ない 場合				
無 回 答	1.94	6.31	11.63	0.00
祭祀を婿に頼んでもかまわない	73.55	61.26	60.47	70.00
必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする	6.45	2.70	13.95	15.00
祭祀をしなくてもよい（仕方がない）	15.48	26.13	13.95	15.00
そ の 他	2.58	3.60	0.00	0.00
(4) 祖 父 母 の 祭 祀				
無 回 答	0.65	6.31	9.30	0.00
よいと考える	61.29	63.06	41.86	65.00
直系長孫がしなければならない	27.74	16.22	41.86	25.00
どちらでもよい	9.03	12.61	6.98	10.00
そ の 他	1.29	1.80	0.00	0.00
(5) 祭祀することについて				
a. 伝統的美風良俗				
無 回 答	0.65	7.21	11.63	0.00
は い	51.61	30.63	67.44	30.00
い い え	47.74	62.16	20.93	70.00
b. 子 女 の 教 育				
無 回 答	0.65	7.21	11.63	0.00
は い	43.87	40.54	48.84	55.00
い い え	55.48	52.25	39.53	45.00
c. 簡 素 化				
無 回 答	0.65	7.21	11.63	0.00
は い	37.42	32.43	34.88	15.00
い い え	61.94	60.36	53.49	85.00
N	155	111	43	20

f. 学 歴 別

	中・高卒	専門大・ 大学中退	大卒・大 学 院 卒	無 回 答
(1) 長男祭祀について				
無 回 答	4.08	7.69	4.44	2.33
必ず長男がしなければならない	51.02	46.15	37.33	39.53
兄弟たちが分けてしてもよい	34.69	38.46	49.78	58.14
姉妹たちも分けてしてもよい	2.04	0.00	3.11	0.00
そ の 他	8.16	0.00	5.33	0.00
(2) 妻 家 の 祭 祀				
無 回 答	2.04	7.69	5.33	2.33
参席している	24.48	15.38	16.88	11.63
参席する必要があるれば参席してもかまわない	61.22	46.15	57.32	76.74
参席する必要はない	8.16	15.38	13.33	6.98
そ の 他	4.08	7.69	7.11	2.33
(3) 娘 じ かい ない 場合				
無 回 答	2.04	8.33	5.33	2.33
祭祀を婿に頼んでもかまわない	69.38	50.00	68.00	67.44
必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする	14.28	33.33	2.22	13.95
祭祀をしなくてもよい（仕方がない）	14.28	8.33	21.33	13.95
そ の 他	0.00	0.00	3.11	2.53
(4) 祖 父 母 の 祭 祀				
無 回 答	2.04	8.33	4.00	2.33
よいと考える	55.10	41.66	60.88	62.79
直系長孫がしなければならない	30.61	50.00	22.66	27.91
どちらでもよい	10.20	0.00	11.11	6.98
そ の 他	2.04	0.00	1.33	0.00
(5) 祭祀することについて				
a. 伝統的美風良俗				
無 回 答	2.04	16.66	4.44	2.33
は い	61.22	58.33	42.66	37.21
い い え	36.73	25.00	52.88	60.47
b. 子 女 の 教 育				
無 回 答	2.04	16.66	4.44	2.33
は い	34.69	50.00	43.55	55.81
い い え	63.26	33.33	52.00	41.86
c. 簡 素 化				
無 回 答	2.04	16.66	4.44	2.33
は い	32.65	25.00	36.88	23.26
い い え	65.30	58.33	58.66	74.42
N	49	12	225	43

g. 都市居住歴別

	本人代	父代	祖父代	先祖代々	無回答
(1) 長男祭祀について					
無回答	2.08	6.57	0.00	7.14	0.00
必ず長男がしなければならない	42.36	40.15	22.22	39.29	50.00
兄弟たちが分けてしてもよい	50.69	44.53	66.67	42.86	50.00
姉妹たちも分けてしてよい	0.00	4.38	5.56	3.57	0.00
その他	4.86	4.38	5.56	7.14	0.00
(2) 妻家の祭祀					
無回答	1.39	6.57	5.56	10.71	0.00
参席している	20.14	14.60	27.78	10.71	0.00
参席する必要があるれば参席してもかまわない	61.81	58.39	61.11	60.71	50.00
参席する必要はない	11.11	15.33	0.00	3.57	50.00
その他	5.56	5.11	5.56	14.29	0.00
(3) 娘しかない場合					
無回答	1.39	6.57	5.56	10.71	0.00
祭祀を婿に頼んでもかまわない	68.06	66.42	72.22	64.29	100.00
必ず養子をとって祭祀を続けて行なうようにする	11.81	3.65	0.00	0.00	0.00
祭祀をしなくてもよい（仕方がない）	15.97	20.44	22.22	25.00	0.00
その他	2.78	2.92	0.00	0.00	0.00
(4) 祖父母の祭祀					
無回答	0.69	5.11	0.00	14.29	0.00
よいと考える	59.72	59.85	66.67	53.57	50.00
直系長孫がしなければならない	29.17	23.36	5.56	28.57	50.00
どちらでもよい	8.33	10.95	27.78	3.57	0.00
その他	2.08	0.73	0.00	0.00	0.00
(5) 祭祀することについて					
a. 伝統的美風良俗					
無回答	0.69	5.84	5.56	10.71	50.00
はい	50.69	42.34	16.67	50.00	50.00
いいえ	48.61	51.82	77.78	39.29	0.00
b. 子女の教育					
無回答	0.69	5.84	5.56	10.71	50.00
はい	50.00	37.96	38.89	46.43	50.00
いいえ	49.31	56.20	55.56	42.86	0.00
c. 簡素化					
無回答	0.69	5.84	5.56	10.71	50.00
はい	34.03	32.85	44.44	35.71	0.00
いいえ	65.28	61.31	50.00	53.57	50.00
N	144	137	18	28	2

h. 地 域 別

i. 祭祀の有無別

	ソウル市	光州市		祭祀者	無
(1) 長男祭祀について			(1) 長男祭祀について		
無 回 答	4.49	3.57	無 回 答	9.38	2.15
必ず長男がしなければなら ない	39.59	41.67	必ず長男がしなければなら ない	43.75	38.63
兄弟たちが分けてしてもよ い	47.76	50.00	兄弟たちが分けてしてもよ い	43.75	50.21
姉妹たちも分けてしてよい	2.45	2.38	姉妹たちも分けてしてよい	1.04	3.00
そ の 他	5.71	2.38	そ の 他	2.08	6.01
(2) 妻家の祭祀			(2) 妻家の祭祀		
無 回 答	4.90	3.57	無 回 答	9.38	2.58
参席している	15.51	22.63	参席している	20.83	15.88
参席する必要があるが参席 してもかまわない	60.41	59.52	参席する必要があるが参席 してもかまわない	57.29	61.37
参席する必要はない	13.06	8.33	参席する必要はない	10.42	12.45
そ の 他	6.12	5.95	そ の 他	2.08	7.73
(3) 娘しかない場合			(3) 娘しかない場合		
無 回 答	4.90	3.57	無 回 答	8.33	3.00
祭祀を婿に頼んでもかまわ ない	66.12	71.43	祭祀を婿に頼んでもかまわ ない	65.63	68.24
必ず養子をとって祭祀を続 けて行なうようにする	4.08	14.29	必ず養子をとって祭祀を続 けて行なうようにする	11.46	4.72
祭祀をしなくてもよい（仕 方がない）	22.04	9.52	祭祀をしなくてもよい（仕 方がない）	13.54	21.03
そ の 他	2.86	1.19	そ の 他	1.04	3.00
(4) 祖父母の祭祀			(4) 祖父母の祭祀		
無 回 答	4.08	2.38	無 回 答	7.29	2.15
よいと考える	58.37	63.10	よいと考える	63.54	57.94
直系長孫がしなければなら ない	25.31	26.19	直系長孫がしなければなら ない	22.92	26.61
どちらでもよい	10.61	8.33	どちらでもよい	5.21	12.02
そ の 他	1.63	0.00	そ の 他	1.04	1.29
(5) 祭祀することについて			(5) 祭祀することについて		
a. 伝統的美風良俗			a. 伝統的美風良俗		
無 回 答	4.90	2.38	無 回 答	6.25	3.43
は い	43.67	50.00	は い	48.96	43.78
い い え	51.43	47.62	い い え	44.79	52.79
b. 子女の教育			b. 子女の教育		
無 回 答	4.90	2.38	無 回 答	6.25	3.43
は い	40.82	53.57	は い	58.33	38.20
い い え	54.29	44.05	い い え	35.42	58.37
c. 簡 素 化			c. 簡 素 化		
無 回 答	4.90	2.38	無 回 答	6.25	3.43
は い	30.20	45.24	は い	30.21	35.62
い い え	64.90	52.38	い い え	63.54	69.95
N	245	84	N	96	233

お わ り に

ここで、今回のアンケート調査で得られた結果を、先に提示した祭祀の変化の事例およびその背景となる社会的変化と照合させてまとめることにしよう。

まず、祭祀の変化の事例と照合させてみよう。

1. 時祭については、その弱化・簡素化が指摘されたが、調査結果においても祭祀を行なっている96例の中でも9例しか行なっておらず(表2-③)、また時祭のためだけに故郷に帰るという人は1例もなく(表8-③)、事例の提示において示されたようにその意味は薄くなっている。ただし、門中の子孫の福祉のために宗親会への帰属は8割近くと(表6-①)、時祭の果たしてきた門中の結束という機能は別の形で維持されている。

2. 茶礼についても、その社会的機能が堂内の集まりから家族の集まりへと縮小する傾向が指摘されたが、「平素会えない親戚までも集まる」というのは1割に満たず、「家族のみ」あるいは「兄弟まで」というのがほぼ9割を占め(表5)、都市においてはことさらに堂内が集まる機会も少なく、調査結果においてもこの傾向が裏付けられている。ただ、アパートで祭祀を行なっていない人のうち茶礼が行なわれる名節に故郷に帰る人は6割近くある(表8-⑧)。この日には親戚よりは学校の同窓に会うという声もあるが、故郷においては平素会えない親戚が集まる機会になっているとも考えられる。

3. 忌祭については、祭祀を行なう人では、その9割以上が行なっており(表2-③)、その形は別にしても命日には祖先の祭祀がほぼ行なわれているといえよう。

a. 忌祭回数の縮小ということでは、合祀という形が指摘された。調査結果でも合祀として夫婦合祀が17例、祖父の代以上を父の祭祀に合祀するが2例あげられた(表4-②)。ただ、夫婦合祀は夫婦両位の合設と誤解していることも考えられ、それほど合祀という形が一般化しているとはいえないのではないか。

b. 儀礼責任者の変化では、長男が必ずしも責任をとらなくなるという指摘があった。調査結果では、長男139例のうち祭祀を行なうが58例であり、次男以下170例のうち祭祀を行なうが28例と、長男が祭祀の責任をもつことが優先されてはいるが、次男以下でも28例が祭祀を行なっているというのは無視できない数字であった(表3-b)。アンケートからはどのような事情によるのかが分からないが、必ず長男が祭祀の責任をとるという原則は順守されていない。また態度においても「必ず長男」という意見は4割であり(表9-①)、「祖父母の祭祀も長孫でなくてはならない」という意見は2

割5分と伝統的あり方を固持しようとする人は少数派になっている(表9-④)。

次に、娘しかいない場合について、伝統的規範に従い養子をとるか、婿にまかせるかなど、いくつかの選択をせまられているという指摘がされた。調査からは、その実態は分からないが、「婿(娘の夫)に頼んでもかまわない」という態度が7割近くもあり(表9-③)、伝統的規範より現実的状况に対応すべきという意見が多い。

c. 儀礼参加者の変化では、娘の参加と、それにともない夫の妻家の祭祀への参加が指摘された。調査結果では、「妻家の祭祀に現在参加している」という人が全体の17%である。この数字は一見とりたてて大きな数字にはみえないが、「必要があれば参加してもよい」という人を加えると8割近くになる(表9-②)。都市では農村に比して妻家が近くにあるないしは行き易いという条件もあるが、妻の実家の祖先祭祀に参加することに抵抗感を感じなくなっており、妻家とのつきあいが重要になっていることを示していると考えられよう。

次に、社会変化との照合においては、

1. 都市化・産業化による生活の合理化によって、祭祀も簡素化されつつある。忌祭の祀り方でも6割以上が「礼法は守り祭需は簡単に」している(表4-③)。しかし、その費用は家毎によってかなり違いがあるが、ふつう一回の祭祀に5～10万ウォンをかけるという数字からは伝統的祭需とは違ってもかなりの御馳走が用意されていると考えられる。態度においても「経済的損失が多く簡素化させるのがよい」には否定的な態度が6割あり(表9-⑤)、簡素化しすぎることへの反省とみることができよう。

2. キリスト教の普及によっても、儒式の祭祀は衰退している。しかし、その急激な教勢の拡大に比べては、一部に強い否定はあるものの全体としては祖先祭祀を否定する動きは弱いようである。キリスト教徒の家で祭祀を行なっている比率は、全体のそれと比べて低くはあるが著しい差はない(表3-e)。また、祭祀を行なわない人のうちキリスト教徒が87人であるが(表3-e)、祭祀を行なわない理由として「宗教的理由」をあげた人は33人であり(表8-①)、キリスト教徒でありながら祭祀を行なわない理由として「宗教的理由」をあげない人もかなりある。キリスト教内部にあって祖先祭祀をめぐる教義の解釈の違いもあり、また家の内部にあってキリスト教は個人の宗教であるため信者とそうでない者の葛藤もあろう。態度においても、伝統的なあり方については改革的な意見が無宗教および他の宗教に比べて強いが、祭祀をすること自体についての意見は大きな差はない。

3. 伝統の固持については、大勢は伝統的祖先祭祀のあり方をいささか修正しつつ行なっているというのが実態である。それについての態度でも現実に対応していこう

という意見が多数を占めている。とはいえ「伝統的祭祀床を守って」(表4-③)とか「娘しかない場合に養子をとるべき」(表9-③)など、あくまでも伝統的あり方に固執すべきという行動・意見も強く残されている。

以上、祖先祭祀の変化についてその実態と態度について調査報告をした。

この変化に関して、態度は革新的であっても実際には伝統的儀礼を忠実に行なっている人もあれば、その逆もあり、一人の人間の中で必ずしも態度と実際の行動は一致しているとは限らない。また一つの家族の中でも、親子あるいは夫婦の間で宗教を異にしたり考え方の違いにより、祖先祭祀をめぐる行動・態度について葛藤があるにちがいない。そして社会にあっても、祖先祭祀をめぐる、その行動・態度には一定の明確な規範は示されておらず、価値の混乱がみられている。

国民意識調査においても、生活の条件自体から韓国社会は「転換期」または「陣痛期」にあることが指摘され、価値観の葛藤・混乱がまだ相当の期間持続することが予想されている[ソウル大学校社会科学研究所 1987a: 23-25]³⁰⁾。また伊藤は「伝統的社会に内包されていた生活原理のギャップは、都市化・産業化とキリスト教の普及によって、新たな断絶と不安定要素を顕在化する傾向がみられ、両者を統合する有効な文化シンボルがますます定立しにくい状況にあるように思われる」と述べている[伊藤 1984: 118-119]。

儒式祖先祭祀は伝統的価値を具現化したものであり、それが現実的に適合しない状況になっていることは明らかである。しかし、外来の宗教であるキリスト教がただちにそれにとって変わることはありえない。価値観の混乱がいわれる中で新しい文化シンボルの一つとしても、「孝」の教えに根ざした伝統的な民族文化に基づき、かつ新しい生活原理に即した祖先祭祀のあり方が模索されるのである。

謝 辞

本稿の基礎となった調査は、韓国国際文化協会の Fellowship grant を受けて実施した。また、韓国の多くの知人にはアンケートの配布についてお世話をおかけし、さらに多くの方々に誠意をもってアンケートに答えていただいた。

30) 価値観の混乱は一つに伝統的価値が現実的に適合しない時に発生する。これに関して、＜社会の利益と個人の利益のどちらが重要であるか＞という問に対しては、伝統的価値とみなせる社会志向が54%、近代的価値とみなせる個人志向は46%という結果である。また保守的か革新的か、これについて＜個人の問題を個人的なものとみるか制度と連関させて考えるか＞という問でみると、個人の困難を個人のせいとする保守的傾向の人が58%、制度のせいに転嫁する革新的な人は42%であった[ソウル大学校社会科学研究所 1987a: 25]。このように社会全般にわたって伝統・保守的と近代・革新的との比率が拮抗している。

なお本稿の内容の骨子は、第680回日本民俗学会談話会（1987年11月8日）、また国立民族学博物館館内合同研究会（1988年7月13日）において「韓国の祖先祭祀の変化について」という題名で口頭で発表した。その際にそれぞれのメンバー諸氏に数々の有益な示唆をいただいた。

最後に、本館の垂水稔助教授と田邊繁治助教授には、ご多忙のところ草稿を読んでくださり、貴重なコメントをいただいた。

これらすべての方々に記して感謝の意を表します。

文 献

朝倉敏夫

- 1987 「韓国民俗学の現状」『民俗学評論』27: 11-20。
- 1988 「現代韓国社会と女性—ソウル・アパート団地における主婦のネットワークから—」『民博通信』42: 63-67。
- 1989a 「韓国の祖先祭祀と社会組織」渡邊欣雄編『環中国海の民族と文化 3 祖先祭祀』凱風社, pp. 41-64。
- 1989b 「韓国の位牌祭祀」渡邊欣雄編『環中国海の民族と文化 3 祖先祭祀』凱風社, pp. 121-143。

張 哲秀

- 1984 『韓国伝統社会の冠婚喪祭』韓国精神文化研究院。

趙 宗植

- 1987 『韓国の墓地——韓国墓地に関する法的研究——』大原出版社（大田）。

崔 在錫

- 1986 「村落社会での養子と祭祀相続の変化」『韓国文化人類学』201-217。
- 1987 「離村と門中組織の変化——全北任実郡の一自然部落の事例研究」『韓国社会の身分階級と社会変動』文学と知性社（ソウル），pp. 246-277。

崔 吉城

- 1985 「宗教と儀礼」伊藤亜人編『もっと知りたい韓国』弘文堂, pp. 141-187。
- 1986 『韓国の祖上崇拜』イエジョン社（ソウル）。

蒲生正男

- 1974 (1966) 「戦後日本社会の構造的変化の試論」蒲生正男編『人間と親族』（現代のエスプリ no. 80）至文堂, pp. 188-206。

韓国文化人類学会

- 1975 「シンポジウム：急変する社会での韓国文化の伝統性」『文化人類学』7: 102-144。
- 1986 「特輯Ⅱ：祖上崇拜についての総合的考察」『韓国文化人類学』18: 71-217。

伊藤亜人

- 1984 「韓国近代化と伝統の再認識」国学院大学日本文化研究所編『アジア文化の再発見』弘文堂, pp. 112-119。
- 1985a 「都市と産業化」伊藤亜人編『もっと知りたい韓国』弘文堂, pp. 133-139。
- 1985b 「現代韓国における文化・社会」伊藤亜人編『もっと知りたい韓国』弘文堂, pp. 261-288。
- 1986 「相続」伊藤亜人他監修『朝鮮を知る事典』平凡社, pp. 250。

JANELLI, R. L. & D. Y. JANELLI

- 1982 *Ancestor Worship and Korean Society*. Stanford U.P.

LEE, Kwang Kyu

- 1986 *Confucian Tradition in the Contemporary Family. The Psycho-Cultural Dynamics of the Confucian Family —Past and Present—*, International Cultural Society of Korea.

李 萬甲

- 1971 「戦後における韓国家族の変化」『社会学評論』22(1): 82-90。

MOON, Seung Gyu

- 1974 Ancestor Worship in Korea: Tradition and Transition. *Journal of Comparative Family Studies* 5(2): 71-87.

朴 弼述

- 1985 『名家の内訓』玄岩社（ソウル）。

RHI, Bou Yong

- 1986 The Confucian Culture and Mental Health Problems in Korea. *The PsychoCultural Dynamics of the Confucian Family —Past and Present—*, International Cultural Society of Korea.

坂元一光

- 1984 「韓国キリスト教の土着化における文化的『新解釈』試論」『比較教育文化研究施設紀要』35: 73-89。

佐藤信行

- 1975 「韓国洛東江上流の山村社会」『アジア経済』16(3): 78-88。
1976 「済州島のサドン」南島史学会編『南島——その歴史と文化』国書刊行会, pp. 219-231。

Seo, Pong Ja

- 1987 「祭祀と祖上崇拜」『伝統文化』2月号: 140-150。

ソウル大学校社会科学研究所

- 1987a 『転換期の韓国社会——国民意識調査資料集——』韓国日報社出版局。
1987b 『韓国の中産層——転換期の韓国社会調査資料集Ⅱ』韓国日報社出版局。

嶋陸奥彦

- 1986 「祖先祭祀」伊藤亜人他監修『朝鮮を知る事典』平凡社, pp. 256-257。

孫 仁銖・李 元浩

- 1984 『韓国人の家訓』文音社（ソウル）。

末成道男

- 1985 「東浦の祖先祭祀——韓国漁村調査報告——」『聖心女子大学論叢』65: 5-96。

東亜日報

- 1987.9.22 「祭祀風習変わりゆく」。

山田鐘一・他

- 1986 『韓国家族法入門』有斐閣。

任 敦姫

- 1985 「韓国祖上崇拜の変遷史——風俗——」『伝統文化』8月号: 47-53。
1986a 「未来社会における祖上崇拜」第18回韓国文化人類学会全国大会発表要旨。
1986b 「韓国祖上崇拜の未来像」『韓国文化人類学』18: 147-173。

吉田光男

- 1986 「両班」伊藤亜人他監修『朝鮮を知る事典』平凡社, pp. 419-420。

柳 東植

- 1975 『韓国の宗教とキリスト教』金忠一訳 洋々社。
1986 「基督教と祖上崇拜」『韓国文化人類学』18: 85-93。